

大阪府立大学 学域

教育目的、教育目標、3 ポリシー

<u>現代システム科学域</u>	4
知識情報システム学類	9
環境システム学類	15
環境共生科学課程	21
社会共生科学課程	22
人間環境科学課程	23
マネジメント学類	24
マネジメント課程	35
経済データサイエンス課程	36
<u>工学域</u>	37
電気電子系学類	41
情報学課程	46

電気電子システム工学課程	49
電子物理工学課程	53
物質科学系学類	56
応用科学課程	61
化学工学課程	64
マテリアル工学課程	68
機械系学類	72
航空宇宙工学課程	77
海洋システム工学課程	80
機械工学課程	84
<u>生命環境科学域</u>	87
獣医学類	90
応用生命科学類	95
生命機能科学課程	100
植物バイオサイエンス課程	103

緑地環境科学類	106
理学類	111
数理科学課程	117
物理科学課程	119
分子科学課程	122
生物科学課程	125
<u>地域保健学域</u>	128
看護学類	132
総合リハビリテーション学類	137
理学療法学専攻	141
作業療法学専攻	145
栄養療法学専攻	149
教育福祉学類	153

現代システム科学域

○教育目的

自然科学、社会科学、人間科学の基本的知識に基づいて現象を多様な要素の相互作用としてとらえるシステムの思考力と、複数の領域の知識を横断的に用いて実社会における問題を特定・分析・解決する領域横断的応用力を備え、卒業後も自律的に考え、学び、成長することができ、高い倫理観をもって持続可能な社会の実現に貢献する人材を育成します。

○教育目標

教養・倫理

- 1.多面的な視点から物事を考えるため、人文・社会・自然科学に関する幅広い教養を身に付けます。
- 2.科学技術が環境や社会に及ぼす影響や効果を理解し、市民としての社会に対する責任の重さについて自覚をもちます。

総合力

- 3.知識情報システム・環境システム・マネジメントの基本的知識を身につけた上で、現象をひとつの側面からとらえるのではなく、多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代の問題群の実像を理解するシステムの思考力、複数の領域の知識を横断的に用いて実社会における問題を特定・分析・解決する領域横断的応用力を獲得します。
- 4.データを用いて事実を把握し、自らの考えを客観的データにより検証する能力を身に付けます。

コミュニケーション能力

- 5.日本語による論理的な表現力、プレゼンテーション能力、討議などのコミュニケーション能力を身に付けるとともに、英語などによる外国語による読解力、リスニング力、表現力を身に付けます。

自主学修・プロジェクト

- 6.自ら調査・学修する自主性を身に付けるとともに課題に粘り強く取り組むことができる継続的学修能力を身に付けます。

7.グループで協議して問題解決を進め、プロジェクトを総合的にまとめる能力を身に付けます。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

現代システム科学域において所定の期間在学して各学類が定める単位を取得し、以下の能力を身につけた学生に学位を授与する。

知識・技能

- 1.（多目的視点）自然科学、社会学、人間科学に関する幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる。
- 2.（データ活用力）客観的なデータを用いて正確に分析・判断ができ、自らの考え方を説明することができる。
- 3.（コミュニケーション能力）複数の言語の知識・技能を活用して、多様な人々とコミュニケーションすることができる。

思考力・判断力・表現力

- 4.（システムの思考力）現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる。
- 5.（領域横断的応用力）複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる。
- 6.（表現力）自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステイナビリティ志向性

- 7.（社会的責任）自ら獲得した学問的知見を基に、つねに既存の社会の倫理を見直していかこうとする責任を自覚することができる。
- 8.（サステイナブル志向）サステイナブルな社会の実現を目指し、他者と協働して課題解決に粘り強く取り組むことができる。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。

知識・技能

- 1.幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、教養科目、基盤科目の中に多様な科目を配置する。
- 2.知識情報システム学類、環境システム学類、マネジメント学類のそれぞれで必要となる専門知識を修得させるため、座学と演習から構成される専門基礎科目、学域共通科目、学類専門科目を体系的に配置する。
- 3.客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、基盤科目、専門基礎科目、学類専門科目の中にデータサイエンス系科目を配置する。
- 4.複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基盤科目、学類専門科目の中にコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

- 5.現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目、学類専門科目の中にシステム系科目を配置する。
- 6.複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる力（領域横断的応用力）を養うために、座学と演習から構成される学域共通科目、他学類専門科目を配置する。
- 7.自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養うために、導入科目、学類専門科目の中にプレゼンテーションを課す科目を配置する。

サステナビリティ志向性

- 8.持続可能性に関する基本的知識を身に付け、市民としての社会的責任を自覚する能力を養うために、学域共通科目の中に倫理系科目を配置する。
- 9.自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むことができる能力を養うために、演習形式による学類専門科目の中に PBL（Project Based Learning）系科目を配置する。

なお成績評価の基準は以下の通りとする。

- 1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた基準に沿って、A+からDの評語で評価する。特に、単位修得（C以上）の基準を到達度として明記する。
- 2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善をはかる。
- 3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善をはかる。

最後に成績評価の方法は以下の通りとする。

- 1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組みあわせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。
- 2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。"

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

グローバル化の進行によって社会の変化が加速し、技術革新がもたらす影響範囲も拡大した現代においては、複数の分野の専門的知識を効果的に組み合わせるシステムの思考力が必要とされています。現代システム科学域は、情報、環境、マネジメントの3つの領域の基礎を学ぶことにより領域横断的な思考法、発想法を養います。さらに、それを基礎としてひとつの専門領域について深く学ぶことにより、従来の枠組みにとらわれず、様々な学問領域の成果を組み合わせる問題解決を図る能力を育てます。

したがって、現代システム科学域では次のような学生を求めています。

- 1.情報、環境、マネジメントのいずれかまたは複数に対する関心があり、それらについて学ぶための基礎的知識をもっている人

- 2.論理的な思考力と自ら学ぶ探求心を備え、勉学意欲に溢れる人
- 3.国際的視野をもって地域社会や国際社会に貢献することをめざす人
- 4.高い倫理観をもって問題解決に取り組む意欲をもっている人

以上にに基づき、次の1～5の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.英文を読んで理解するための基礎的な能力を身につけていること
- 3.データを取り扱うための基礎的な数学的素養を学んでいること
- 4.論理的な思考力を備えていること
- 5.他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができること

一般選抜（後期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、英文を読解する能力、基礎的な数学的素養および論理的な思考力を備えていることを、大学入学共通テストの外国語、数学、国語によって評価します。さらに、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書によって評価します。

帰国生徒特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、英文を読解する能力を有していることを、TOEFLの成績によって評価します。また、基礎的な数学的素養を有していること、および他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、数学Ⅰ・Ⅱの内容を含んだ口頭試問・面接によって評価します。さらに、論理的な思考力を備えていることを、小論文によって評価します。

知識情報システム学類

○教育目的

人々や社会の日常活動に不可欠な情報システムを実現するために、情報技術に関する理論やインターネットを使いこなす実践力などの高度情報化社会の基礎となる情報に関連する広範な専門分野の基礎学力を身に付け、誰もがどこでもいつでも利用できる情報システムをデザインする能力、他者の価値観を尊重できる柔軟さと包容力を備えた上で自律的な判断基準で行動する責任力、環境科学、社会科学、人間科学、経済・経営科学などの社会システム科学に関連する専門分野の特性を理解し、技術の進歩および社会の変容にともなう課題を継続して解決するための科学的な分析力・思考力を持つ人材を育成することを目的とする。

○教育目標

教養・倫理

- 1.人文・社会・自然科学に関する幅広い教養を身に付けるとともに、環境科学、社会科学、人間科学、経済・経営科学などの社会システム科学に関連する分野の基礎知識を身に付け、幅広い視野で物事を考える素養と能力を身に付ける。
- 2.情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、社会的な倫理観と責任感をもとに自分で判断して行動できる能力を身に付ける。

総合力

- 3.知識科学、情報システム工学分野を基盤とし、それらの関連分野の広範な知識と技術を体系的に理解し、身に付けるとともに、それらの知識や技術を応用することのできる創造的な思考能力を身に付ける。
- 4.大量かつ多様な情報から必要な情報を収集し、論理的に分析し、新たな知識、法則、特徴などを発見する能力を身に付けるとともに、社会的問題に対する分析と課題発見の能力、課題を定量化・モデル化する方法を身に付け、すでに獲得した知識や技術を総合的に活用することにより、課題を解決するためのシステムデザイン能力およびシステム・マネジメント能力を身に付ける。

コミュニケーション能力

5.自分の考えを論理的にまとめ、的確に表現する能力を身に付けるとともに、他人の意見を理解し討論する能力、情報技術を活用して情報を発信する能力などのコミュニケーション能力を身に付ける。また、英語などの外国語による読解力、リスニング力、表現力を養い、国際的なコミュニケーション基礎能力を身に付ける。

自主学习・プロジェクト

6.知識科学、情報システム工学分野とそれらの関連分野において、自ら学習目標・達成目標をたて、新たな知識や必要とする情報を収集し、社会の変化に対応して継続的、自律的に生涯にわたって学習できる能力を身に付ける。

7.グループで協議・協働して調査・実験・学習する能力を身に付けるとともに、グループ内における自らの立場と役割を理解し、課題解決のためのプロジェクトを遂行できる能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

知識情報システム学類では、現代社会の維持・発展に不可欠となっている情報システムについて理解するとともに、サステナブルな社会を実現するための課題解決の手段として活用することができるような情報システムを主体的にデザインする能力、また急速に進歩し続ける情報通信技術を積極的に取り入れる態度を身に付けることで、社会の変容にともなう課題を継続して解決するための科学的な分析力・思考力を持つ人材を育成することを目的とする。

このような目的に従い、以下の能力を持つものに対して学位を与える。

知識・技能

- 1.（多面的視点）自然科学、社会科学、人間科学に関する統合的知識・技能を持つとともに、知識情報システム学に関する専門知識を身につけ、現実社会の事象を多面的に捉えることができる。
- 2.（データ活用力）情報通信技術を積極的に取り入れ、データサイエンスの知識・技能を用いて、事象を分析・説明することができる。
- 3.（コミュニケーション能力）複数の言語の知識・技能を活用して、多様な人々とコミュ

ニケーションすることができる。

思考力・判断力・表現力

4. (領域横断的応用力) 情報学、社会科学、知識科学、生産科学、医療保健学など、複数領域の知識を横断的に用いて、現代システムに内在する課題の解決を目指すことができる。

5. (システムの思考力) 現象を多様な要素の相互作用として捉えることによって、現代システムの本質を深く探求することができる。

6. (表現力) 現代システムの目指すべき方向性とそれを実現するための方策を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステナビリティ志向性

7. (社会的責任) 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会システムの一員としての高い倫理観を有している。

8. (サステナブル志向) サステナブルな社会の実現を他者と協働して課題解決に粘り強く取り組むことができる。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

知識情報システム学類では、社会における諸問題を解決し、知識情報システムを開発・運用できる能力を養うために、以下のようなカリキュラムを提供する。

知識・技能

1. 幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、1年次を中心に初年次ゼミナール、人文・社会系教養科目、自然科学・複合領域系教養科目、専門基礎科目等の共通教育科目を配置する。

2. 知識情報システム学類で必要となる専門知識を修得させるため、1年次に座学による必修科目「サステナビリティ入門」等の学域共通科目、1年次から2年次にかけて「線形代数 I,II」「解析学基礎 I,II」「コンピュータアーキテクチャ」等の専門基礎科目および、2年次前期必修の「アルゴリズムとデータ構造」等の学類専門科目、各年次に他学類専門科目を体系的に配置する。

3.客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、基盤科目、専門基礎科目、学類専門科目の中にデータサイエンス系科目を配置する。

4.複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基盤科目として英語科目および初修外国語科目、2年次から3年次までの必修科目として演習形式による「知識情報システム学演習 I-IV」、4年次の必修科目として「知識情報システム学英語演習」などのコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

5. 現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる力（システムの思考力）を養うために、2年次から【システム・ネットワーク】【社会科学】【医療・教育】のそれぞれの分野に分かれた座学を基礎とする学類専門科目の中にシステム系科目を配置する。

6.複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる力（領域横断的応用力）を養うために、演習形式の「知識情報システム学演習 II」などの学域共通科目、他学類専門科目を配置する。

7.自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養うために、プレゼンテーションを課す科目として「知識情報システム学演習 IV」などを配置する。

サステイナビリティ志向性

8. 持続可能性に関する基本的知識を身に付け、市民としての社会的責任を自覚する能力を養うために、学域共通科目の中にインターンシップを倫理系科目として配置する。

9.自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むことができる能力を養うために、学類専門科目の中に演習系科目として2年次から3年次まで「知識情報システム学演習 I-IV」を必修科目として配置し、4年次に「知識情報システム学卒業研究」を必修科目として配置する。

なお本学類の学修成果の評価方針は現代システム科学域カリキュラムポリシー記載のものと同一とする。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

知識情報システム学類は、技術の急激な発展と価値観の多様化する現代社会が抱える様々な課題に対応するために、多種多様な情報や知識を整理し、課題の分析・解決を行う上で必要となる情報システムのデザイン能力およびマネジメント能力を養うための教育研究を行います。知識科学、情報システム工学をはじめとする情報に関連する広範な専門教育に加えて、社会システム科学に関連する教育を行うことにより、柔軟な発想および論理的思考にもとづく課題発見能力と問題解決能力を育成し、高度情報化社会の発展やそれと調和したグローバル社会の保全に寄与するとともに、外国語能力やコミュニケーション能力に優れた人材の養成をめざします。

したがって、知識情報システム学類では次のような学生を求めています。

- 1.情報通信技術に関する知識に対して強い関心があり、それらについて学ぶための基礎的知識をもっている人
- 2.論理的な思考力と自ら学ぶ探求心を備え、勉学意欲に溢れる人
- 3.国際的視野をもって地域社会や国際社会に貢献することをめざす人
- 4.個人情報保護など高い情報倫理観をもって課題解決に励む意欲をもっている人

以上に基づき、次の 1～5 の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること
- 3.システムの諸課題を取り扱うための基礎的な数学的素養を学んでいること
- 4.英語あるいは数学のどちらかが得意で、論理的な思考力を備えていること
- 5.他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること

を、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。また、基礎的な数学的素養を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。さらに、英語あるいは数学のどちらかが得意で、論理的な思考力を備えていることを、個別学力検査の英語、数学によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力、基礎的な数学的素養および論理的な思考力を備えていることを、大学入学共通テストの外国語（英語）、数学、国語によって評価します。さらに、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、活動報告書、調査書、推薦書によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。また、基礎的な数学的素養を有していることを、日本留学試験の数学によって評価します。さらに、論理的な思考力を備えていることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、口頭試問・面接によって評価します。"

環境システム学類

○教育目的

幸福観・共生観・環境倫理といった環境問題に取り組む上で不可欠な人間の内面的素養（環境マインド）を身に付け、環境問題の本質を多面的に理解するための俯瞰的知識と課題解決に必要な専門的知識を有し、さらに持続可能な社会システムを構築するために必要な技能（スキル）である、他者の心理や多様な価値観への理解に基づくコミュニケーション能力、課題の発見から解決に至る過程を論理的・システムの的に思考しプロジェクトを遂行することのできる問題解決能力を備えた人材を育成することを目的とする。

○教育目標

教養・倫理

- 1.環境を多面的な視点から考えるため、人文・社会・自然科学などに関する幅広い教養を身に付ける。
- 2.成長の限界や持続可能性、自然・生態系のつながり、生態系の一員としての人と、人の集合体である集団や社会のつながりを学ぶことによって、人間の真の幸福とは何かを考究し、全てが共に生きることの重要性を理解できる能力を身に付けるとともに、科学技術など学問の発展が環境や社会へ与える影響について多面的に理解し、環境に関する知識・技能を持った専門家としての責任を自覚できる能力を身に付ける。

総合力

- 3.環境共生科学、社会共生科学、人間環境科学の専門的知識と、それらの相互関係について理解できる能力を身に付けるとともに、環境問題が、自然環境、社会環境、人間環境の複合的な問題であることを理解し、それらを俯瞰的・鳥瞰的に捉えることのできる能力を身に付ける。
- 4.与えられた課題あるいは自ら発見した課題に対して、その問題の本質を理解し、整理・分析し、解決するための方法について論理的・システムの的に思考できる能力を身に付ける。

コミュニケーション能力

- 5.日本語、英語ならびにその他外国語による読解力、論理的な文章表現力、リスニング力、発表力、討論力などのコミュニケーション能力を身に付けるとともに、民族・思想・

階層・言語などの違いにより多様な価値観が存在することを学び、互いに尊重し理解することのできるコミュニケーション能力を身に付ける。

自主学習・プロジェクト

6.環境に関する様々な問題に関して、自ら解決すべき課題を見つけ、継続して調査・学習することのできる能力を身に付ける。

7.与えられた課題あるいは自ら発見した課題に対して、グループで協議して調査・学習することのできる能力を身に付けるとともに、グループ内における自らの立場と役割を理解し、課題解決に向けて総合的にプロジェクトを遂行できる能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

環境システム学類において所定の期間在学して各課程が定める単位を取得し、以下の能力を身につけた学生に学位を授与する。

知識・技能

- 1.（多目的視点）自然科学、社会科学、人間科学に関する幅広い知識・技能を持ち、環境を多面的に捉えることができる。
- 2.（データ活用力）客観的なデータを用いて正確に分析・判断ができ、自らの考え方を説明することができる。
- 3.（コミュニケーション能力）複数の言語の知識・技能を習得して、多様な人々とコミュニケーションを取ることができる。

思考力・判断力・表現力

- 4.（システムの思考力）環境を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる。
- 5.（領域横断的応用力）環境共生科学、社会共生科学、人間環境科学の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる。
- 6.（表現力）自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステナビリティ志向性

7. (社会的責任) 自ら獲得した学問的知見を基に、つねに既存の社会の倫理を見直していかうとする責任を自覚することができる。
8. (サステイナブル志向) サステイナブルな社会の実現を目指し、他者と協働して環境に関わる課題解決に粘り強く取り組むことができる。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

環境システム学類は学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。

知識・技能

1. (多面的視点) 幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、1年次から2年次を中心に教養科目（人文・社会系、自然科学・複合領域系）、基盤科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）の中に多様な科目を配置する。
2. (体系的配置) 環境共生科学課程、社会共生科学課程、人間環境科学課程のそれぞれで必要となる専門知識を修得させるため、各課程の入門科目等の学類基盤科目を1年次後期から2年次前期に配置し、さらに座学と演習から構成される専門基礎科目、学域共通科目、学類専門科目を体系的に配置する。
3. (データ活用力) 客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、基盤科目、専門基礎科目、学類専門科目の中にデータサイエンス系科目を配置する。
4. (コミュニケーション能力) 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基盤科目、学類専門科目の中に外国語科目、「環境システム学海外インターンシップ」などのコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

5. (システムの思考力) 現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる力（システムの思考力）を養うために、座学と演習から構成される学域共通科目、学類専門科目の中にシステム系科目を配置する。

6. (領域横断的応用力) 複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる力(領域横断的応用力)を養うために、学域共通科目、他学類専門科目を配置する。

7. (表現力) 自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養うために、1年次前期の導入科目(初年次ゼミナール)、2年次から3年次の学類専門科目の中に「環境システム学演習」などプレゼンテーションを課す科目を配置する。

サステナビリティ志向性

8. (社会的責任) 持続可能性に関する基本的知識を身に付け、市民としての社会的責任を自覚する能力を養うために、学域共通科目の中に座学を中心とする倫理系科目を配置する。

9. (サステイナブル志向) 自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むことができる能力を養うために、学類専門科目の中に「環境システム学演習」などの演習系科目を配置する。

なお本学類の学修成果の評価方針は現代システム科学域カリキュラムポリシー記載のものと同一とする。

○アドミッション・ポリシー(学生受入の方針)

環境システム学類は、現代社会が抱える様々な問題を、気候や生態系の変化に象徴される自然環境の問題、人間の内面的な状態に起因する人間環境の問題、人の集合体である社会構造が抱える社会環境の問題の複合的な問題として捉え、地球全体ならびに陸海域の環境と生態系の機能と構造を理解し、生態系の一員としての人類の共生に寄与するとともに、人間の真の幸福とは何かを考究し、地域や世代を超えた持続可能な社会システムの構築に貢献することのできる人材を育成することをめざします。

したがって、環境システム学類では次のような学生を求めています。

1. 自然環境、社会環境、人間環境のいずれかに対する強い関心があり、それらについて学ぶための基礎的知識をもっている人
2. 論理的な思考力と自ら学ぶ探求心を備え、勉学意欲に溢れる人

- 3.国際的視野をもって地域社会や国際社会に貢献することをめざす人
- 4.高い倫理観をもって、環境問題をはじめとする現代の諸問題に取り組む意欲をもっている人

以上に基づき、次の 1～4 の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.論理的な思考力を備えていること
- 3.日本語による高度な表現能力および英語に関する素養を有すること、もしくは数学および理科に関する素養を有すること
- 4.他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。英語小論文型では、論理的な思考力、日本語による高度な表現能力および英語の素養を有していることを、個別学力検査の英語、小論文によって評価します。また、理数型では、論理的な思考力、数学および理科に関する素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科によって評価します。さらに、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、調査書、推薦書によって評価します。また、論理的な思考力、日本語による高度な表現能力および英語に関する素養を有していることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。さらに、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、提出書類と口頭試問・面接によって評価します。

社会人特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、出願資格を証明する書類、履歴書、志願理由書によって評価します。論理的な思考力、日本語による高度な表現能力および英語の素養を有していることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。また、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、提出書類と口頭試問・面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、論理的な思考力、日本語による高度な表現能力を有していることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。さらに、英語の素養を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、口頭試問・面接によって評価します。

環境共生科学課程

○教育目的

本課程では、地球規模といったグローバルな領域から陸海域におけるローカルな領域に至る環境問題に対し、自然環境科学的なアプローチから問題解決に向けた調査・計測、診断・評価に関する技術的方法を教育研究するとともに、これら複雑に絡み合う環境問題に対し、工学的、生態学的な環境再生技術を基礎に、人間の心理面や社会システムのあり方といった学際的な視点も考慮した環境計画を立案し、持続可能な環境システムの構築を通じて環境共生社会の形成に貢献できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.環境マインド：地球規模での環境問題の軽減や陸海域での持続可能な環境システムの構築といった課題を総合的に理解し、環境に関する知識・技能を持った専門家として環境倫理と責任をもって人と自然との環境共生に取り組むことのできる能力を養います。
- 2.俯瞰的環境共生知識：地球規模ならびに陸海域でのローカルな環境問題に関する、自然環境科学、人間環境科学、社会環境科学の基礎知識を有し、複合的な環境問題に対する解決策を思考できる能力を養います。
- 3.専門的環境共生知識：自然環境・生態系・資源循環・エネルギー・景観といった多岐に渡る環境システムに関する知識を有し、環境アセスメントや環境計画等の基礎理論を理解し実際の環境問題に応用できる能力を養います。
- 4.問題解決能力：陸海域における自然環境や生態系の環境モニタリング等を通じて、自ら解決すべき課題を発見し、継続して調査・学習することのできる能力を養うとともに、与えられた課題あるいは自ら発見した課題に対して、その問題の本質を理解し、整理・分析し、解決するための方法について論理的・系統的に思考できる能力と環境技術の開発・応用ができる能力を養います。

社会共生科学課程

○教育目的

本課程では、環境システムと人間社会の関係が地球規模で引き起こした数々の社会問題を、社会科学的・思想的側面からダイナミックに捉え直すことによって、持続可能かつ公正な原理で人間社会を運営する原理と方法を教育研究するとともに、異なる価値観をもった人々が他を抑圧することなく共生し、それらの社会がさらに環境システムと豊かに共生するための思想や、システムの思考に基づく実践知を開発します。それを通して、21世紀の地球社会を異文化や環境と調和しつつ、人々が真の幸福を追究できるような社会の構想や具体的な制度の設計・実現に貢献できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.環境マインド：価値観の多様な社会において全てが共に生きることの重要性を理解できる能力を養い、また環境との豊かな関係を構築するための環境倫理や社会システムを創出できる能力を養うことを通して、グローバルな科学文明のもとで生きる人間の真の幸福とは何かを考究することのできる能力を養います。
- 2.俯瞰的社会共生知識：人間社会が環境システムとのあいだで引き起こした様々な社会問題を、自然環境科学、人間環境科学、社会環境科学の視点から横断的に理解し、それらを解決する道を模索できる能力を養います。
- 3.専門的社会共生知識：現代社会システム・科学技術の進展・言語や制度を含む社会環境・近代化が人類にもたらした功罪といった多岐にわたる社会環境に関する知識を有し、持続可能かつ公正な原理で人間社会を運営する原理と方法を理解することのできる能力を養います。
- 4.問題解決能力：現代社会で生じている様々な事象を素材として自ら課題を発見し、社会環境科学的視点のみならず、自然環境科学的・人間環境科学的な知識をも駆使しながら、集団・組織内外の問題解決に向けた合意形成と、その成果を社会に発信するための、より高度なコミュニケーション能力を養います。

人間環境科学課程

○教育目的

本課程では、実験心理学的な普遍的アプローチによる人間環境科学の研究法と臨床心理学的な個別のアプローチによる人間環境科学の研究法を統合的に学習することを通して、ヒトがさまざまな環境下において、どのようなこころのはたらきを成立させているのか、そして、こころの現れとしての行動をどのように行うのかについての人間環境科学に関する知識・理解と、自然・生態系に関する環境共生知識、社会・文化に関する共生社会知識を融合することによって、地球環境に生きるヒトの真の幸福を実現するための環境システムの構築に貢献できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.環境マインド：自然・生態系のダイナミズム、社会・文化のダイナミズムの知識を学習することを通して、ヒトも環境を構成する一員であることを理解できる能力を養うとともに、科学技術など学問の発展が環境や社会やヒトへ与える影響について多面的に理解し、環境に関する知識・技能を持った専門家としての責任を自覚できる能力を養います。
- 2.俯瞰的人間環境知識：人間が自然環境や社会環境の中で活動する際に生じる心理的な問題を、自然環境科学、人間環境科学、社会環境科学の基礎知識を用いて総合的に理解し、それらの問題に対する解決策を思考できる能力を養います。
- 3.専門的人間環境知識：自然・社会・人間環境と人間との相互作用を人間の心的プロセスの視点から可視化して整理、分析するための知識・技能と、環境との間で生じる心の不適応を理解し、それを解消するための心理療法に関する知識・技能を持ち、それらを活用して人の心のはたらきを理解、援助できる能力を養います。
- 4.問題解決能力：様々な環境下で現れる心的問題に関して、自ら課題を発見し、問題を解明するための心理学研究法を獲得させるとともに、得られたデータを整理・分析し、課題の解決法について論理的・システムの的に思考できる能力を養います。

マネジメント学類

○教育目的

大きく変貌する現代社会システムの諸問題を理論的・実証的に分析し、国際感覚が豊かで産業社会に要請される情報処理能力や実践的・創造的能力とシステムの思考力、さらに経済学・経営学・法学・経済データサイエンス・会計学・生産システム科学の専門知識に基づくマネジメント力を備え、優れた企画・政策立案能力を持った人材を育成する。

○教育目標

教養・倫理

1.社会科学から人文科学、自然科学に至るまでを幅広く学習し、教養を身に付けるとともに、長期的かつグローバルな視点から物事を考える能力を身に付ける。

2.経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、倫理観と責任感を持って技術マネジメントの方向性を判断して、行動できる能力を身に付ける。

総合力

3.経済学・経営学・法学・経済データサイエンス・会計学・生産システム科学の基本的知識ならびに技術を体系的に理解・修得するとともに、それらの知識や技術を応用し、組織における課題を解決できるマネジメント能力を身に付ける。

社会的問題に関する課題を発見し、必要な情報やデータを収集し、それらを用いて現状を把握し、仮説を発見し検証する能力を身に付ける。

コミュニケーション能力

4.自分の考えを論理的にまとめ、的確に表現するとともに、他人の意見を理解し討論できるコミュニケーション能力を身に付ける。さらに英語などの外国語の読解力、リスニング力、表現力を養い、国際社会で通用するコミュニケーション能力を身に付ける。

自主学習・プロジェクト

5.自ら学習目標・達成目標をたて、自主的に学習し、卒業後も社会の変化に対応して継続的に学習できる能力を身に付ける。

与えられた課題や自ら設定した課題に対してグループで協議し、課題を解決するための学習、調査、分析を協力して行い、プロジェクトを遂行する能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

マネジメント学類において所定の期間在学して定める単位を取得し、以下の能力を身につけた学生に学位を授与する。

知識・技能

- 1.（多面的視点）自然科学、社会科学、人間科学に関する幅広い知識・技能を基礎としながら、経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の知識・技能を体系的に修得し、事象を多面的に捉えることができる。
- 2.（データ活用力）データの特徴をふまえた適切な分析手法の選択、およびその手法に基づく正しい判断を行うことができる。また、その判断を伴う自らの考えを説明することができる。
- 3.（コミュニケーション能力）マネジメント学類で学ぶ知識・技能を基礎としながら、複数の言語を活用して、多様な人々とコミュニケーションすることができる。

思考力・判断力・表現力

- 4.（システムの思考力）複雑な現象を多様な要素の相互作用の中で捉えることによって、その現象をシステムとして理解し、その本質を思考することができる。
- 5.（領域横断的応用力）経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学における知識・技能を領域横断的に用いて、複雑な問題群を概念化して、その共通性を抽出して分析し、解決策を提案することができる。
- 6.（表現力）自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステイナビリティ志向性

- 7.（社会的責任）経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、自ら獲得した学問的知見に基づき、つねに既存の社会の倫理を見直していこうとする責任を自覚することができる。

8. (サステイナブル志向) サステイナブルな社会の実現を目指し、他者と協働して課題解決に粘り強く取り組むことができる。

(マネジメント課程 ディプロマ・ポリシー)

マネジメント課程において所定の期間在学して定める単位を取得し、以下の能力を身につけた学生に学位を授与する。

知識・技能

1. (多面的視点) 自然科学、社会科学、人間科学に関する幅広い知識・技能を基礎としながら、経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の知識・技能を、経営・法律系科目に重点を置きながら、体系的に修得し、事象を多面的に捉えることができる。
2. (データ活用力) データの特徴をふまえた適切な分析手法の選択、およびその手法に基づく正しい判断を行うことができる。また、その判断を伴う自らの考えを説明することができる。
3. (コミュニケーション能力) マネジメント課程で学ぶ知識・技能を基礎としながら、複数の言語を活用して、多様な人々とコミュニケーションすることができる。

思考力・判断力・表現力

4. (システムの思考力) 複雑な現象を多様な要素の相互作用の中で捉えることによって、その現象をシステムとして理解し、その本質を思考することができる。
5. (領域横断的応用力) 経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学における知識・技能を領域横断的に用いて、複雑な問題群を概念化して、その共通性を抽出して分析し、解決策を提案することができる。
6. (表現力) 自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステイナビリティ志向性

7. (社会的責任) 経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、自ら獲得した学問的知見に基づき、つねに既存の社会の倫理を見直していこうとする

責任を自覚することができる。

8. (サステイナブル志向) サステイナブルな社会の実現を目指し、他者と協働して課題解決に粘り強く取り組むことができる。

(経済データサイエンス課程 ディプロマ・ポリシー)

経済データサイエンス課程において所定の期間在学して定める単位を取得し、以下の能力を身につけた学生に学位を授与する。

知識・技能

1. (多面的視点) 自然科学、社会科学、人間科学に関する幅広い知識・技能を基礎としながら、経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の知識・技能を、経済系科目に重点を置きながら、体系的に修得し、事象を多面的に捉えることができる。
2. (データ活用力) データの特徴をふまえた適切な分析手法の選択、およびその手法に基づく正しい判断を行うことができる。また、その判断を伴う自らの考えを説明することができる。
3. (コミュニケーション能力) 経済データサイエンス課程で学ぶ知識・技能を基礎としながら、複数の言語を活用して、多様な人々とコミュニケーションすることができる。

思考力・判断力・表現力

4. (システムの思考力) 複雑な現象を多様な要素の相互作用の中で捉えることによって、その現象をシステムとして理解し、その本質を思考することができる。
5. (領域横断的応用力) 経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学における知識・技能を領域横断的に用いて、複雑な問題群を概念化して、その共通性を抽出して分析し、解決策を提案することができる。
6. (表現力) 自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる。

サステイナビリティ志向性

7. (社会的責任) 経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、自ら獲得した学問的知見に基づき、つねに既存の社会の倫理を見直していこうとする責任を自覚することができる。

8. (サステイナブル志向) サステイナブルな社会の実現を目指し、他者と協働して課題解決に粘り強く取り組むことができる。

○カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施方針)

マネジメント学類は、学位授与に必要とされる能力 (ディプロマポリシー) を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。

知識・技能

1. 幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、1 年次を中心に初年次ゼミナール、人文・社会系教養科目、自然科学・複合領域系教養科目、専門基礎科目等を配置する。

2. マネジメント学類において必要となる経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の専門知識を修得させるため、1 年次および 2 年次に、それらの学類専門科目のうち、基礎的な科目 (一部の科目を除き学類基盤科目) を配置する。3 年次および 4 年次に、それらに関する専門科目 (一部の科目を除き学類発展科目) を配置する。

3. 客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、専門基礎科目の中の理系基礎科目に「統計学基礎 I,II」、学類基盤科目に「経済データサイエンス入門」、「計量経済学 I」、「経済データサイエンス演習 I,II」、学類発展科目に「計量経済学 II」、「経済データマイニング」等の座学と演習から構成されるデータサイエンス系科目を配置する。

4. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、外国語科目 (英語) および外国語科目 (初修外国語)、学類専門科目の中の学類基盤科目に「基礎ゼミナール I,II」「外書ゼミナール」等のコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

5. 現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解するこ

とができる力（システムの思考力）を養うために、システム系科目として学類基盤科目に「ミクロ経済学 I,II」、「マクロ経済学 I,II」、「生産システム科学」、学類発展科目に「産業組織 I,II」「管理会計 I,II」、「会社法 I,II」等の座学を基礎とする科目を配置する。

6.複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる力（領域横断的応用力）を養うために、学類基盤科目に「経済政策入門」、学類発展科目に「国際貿易 I,II」、「社会保障政策」、「医療経済学」、「経営情報システム I,II」等および他学類専門科目を配置する。

7.自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養うために、学類基盤科目にプレゼンテーションを課す演習系科目「マネジメント学類演習 I」等を配置する。

サステイナビリティ志向性

8.持続可能性に関する基本的知識を身に付け、経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、倫理観と責任感を持って技術マネジメントの方向性を判断して、行動できる能力を養うため、1年次に学域共通科目に「サステイナビリティ入門」、「社会システムとサステイナビリティ」、学類基盤科目に「倫理学」、学類発展科目に「環境経済学 A, B」等の座学を基礎とする科目を配置する。

9.自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むことができる能力を養うために、学類基盤科目に必修科目として「マネジメント学類演習 II」等の演習系の科目を配置する。

なお本学類の学修成果の評価方針は現代システム科学域カリキュラムポリシー記載のものと同一とする。

（マネジメント課程 カリキュラム・ポリシー）

マネジメント課程は、学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。

知識・技能

1.幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、1年

次を中心に初年次ゼミナール、人文・社会系教養科目、自然科学・複合領域系教養科目、専門基礎科目等を配置する。

2.マネジメント学類において必要となる経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の専門知識を修得させるため、1年次および2年次に、それらの学類専門科目のうち、基礎的な科目（一部の科目を除き学類基盤科目）を配置する。3年次および4年次に、それらに関する専門科目（一部の科目を除き学類発展科目）を配置する。特に、マネジメント課程では、経営学、会計学、法学、生産システム科学の専門知識を主として修得させるために、学類発展科目（経営・法律系科目）に重点を置く。

3.客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、専門基礎科目の中の理系基礎科目に「統計学基礎 I,II」、学類基盤科目に「経済データサイエンス入門」、「計量経済学 I」、「経済データサイエンス演習 I,II」、学類発展科目に「計量経済学 II」、「経済データマイニング」等のデータサイエンス系科目を配置する。

4.複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、外国語科目（英語）および外国語科目（初修外国語）、学類専門科目の中の学類基盤科目に「基礎ゼミナール I,II」「外書ゼミナール」等のコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

5.現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解することができる力（システムの思考力）を養うために、システム系科目として学類基盤科目に「ミクロ経済学 I,II」、「マクロ経済学 I,II」、「生産システム科学」、学類発展科目に「産業組織 I,II」「管理会計 I,II」、「会社法 I,II」等を配置する。

6.複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決することができる力（領域横断的応用力）を養うために、学類基盤科目に「経済政策入門」、学類発展科目に「国際貿易 I,II」、「社会保障政策」、「医療経済学」、「経営情報システム I,II」等および他学類専門科目を配置する。

7.自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養うために、学類基盤科目にプレゼンテーションを課す科目「マネジメント学類演習 I」等を配置する。

サステナビリティ志向性

8.持続可能性に関する基本的知識を身に付け、経済活動や技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響の大きさを理解し、倫理観と責任感を持って技術マネジメントの方向性を判断

して、行動できる能力を養うため、1年次に学域共通科目に「サステナビリティ入門」、
「社会システムとサステナビリティ」、学類基盤科目に「倫理学」、学類発展科目に「環境経済学 A, B」等を配置する。

9.自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むことができる能力を養うために、学類基盤科目に必修科目として「マネジメント学類演習 II」を配置する。

なお本課程の学修成果の評価方針は現代システム科学域カリキュラムポリシー記載のものと同一とする。

（経済データサイエンス課程 カリキュラム・ポリシー）

経済データサイエンス課程は、学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。

知識・技能

1.幅広い知識・技能を持ち、事象を多面的に捉えることができる能力を養うために、1年次を中心に初年次ゼミナール、人文・社会系教養科目、自然科学・複合領域系教養科目、専門基礎科目等を配置する。

2.マネジメント学類において必要となる経済学、経営学、会計学、法学、経済データサイエンス、生産システム科学の専門知識を修得させるため、1年次および2年次に、それらの学類専門科目のうち、基礎的な科目（一部の科目を除き学類基盤科目）を配置する。3年次および4年次に、それらに関する専門科目（一部の科目を除き学類発展科目）を配置する。特に、経済データサイエンス課程では、経済学、経済データサイエンスの専門知識を主として修得させるために、学類発展科目（経済系科目）に重点を置く。

3.客観的なデータを用いて正確に分析・判断できる能力を養うために、専門基礎科目の中の理系基礎科目に「統計学基礎 I, II」、学類基盤科目に「経済データサイエンス入門」、「計量経済学 I」、「経済データサイエンス演習 I, II」、学類発展科目に「計量経済学 II」、「経済データマイニング」等のデータサイエンス系科目を配置する。

4.複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、外国語科目（英語）および外国語科目（初修外国語）、学類専門科目の中の学類基盤科目に「基

礎ゼミナール I,II」「外書ゼミナール」等のコミュニケーション系科目を配置する。

思考力・判断力・表現力

5.現象を多様な要素の影響の関係性として捉えることによって、問題の本質を理解 することができる力（システムの思考力）を養うために、システム系科目として学類基盤 科目に「ミクロ経済学 I,II」、「マクロ経済学 I,II」、「生産システム科学」、学類発展科 目に「産業組織 I,II」「管理会計 I,II」、「会社法 I,II」等を配置する。

6.複数の領域の知識を横断的に用いて、問題を概念化して共通性を抽出し、分析・解決 することができる力（領域横断的応用力）を養うために、学類基盤科目に「経済政策入 門」、学類発展科目に「国際貿易 I,II」、「社会保障政策」、「医療経済学」、「経営情報システ ム I,II」等および他学類専門科目を配置する。

7.自らが行った問題解決への筋道を適切な表現法を用いて説明することができる力を養う ために、学類基盤科目にプレゼンテーションを課す科目「マネジメント学類演習 I」等を 配置する。

サステイナビリティ志向性

8.持続可能性に関する基本的知識を身に付け、経済活動や技術が人間社会ならびに環境に 及ぼす影響の大きさを理解し、倫理観と責任感を持って技術マネジメントの方向性を判断 して、行動できる能力を養うため、1 年次に学域共通科目に「サステイナビリティ入門」、 「社会システムとサステイナビリティ」、学類基盤科目に「倫理学」、学類発展科目に「環 境経済学 A, B」等を配置する。

9.自ら課題を発見して取り組む継続的学習能力、他者と協働して課題解決に取り組むこ とができる能力を養うために、学類基盤科目に必修科目として「マネジメント学類演習 II」 を配置する。

なお本課程の学修成果の評価方針は現代システム科学域カリキュラムポリシー記載のものと同一とする。

アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

マネジメント学類は、現代システム科学域の中で、知識情報システム学類および環境システム学類と連携し、複雑な現代システムに対応する複合的な領域に対して、融合的な教育・研究をすすめる。経済学、経営学とそれに関連する法学および生産システム科学の学問

の進歩発展に寄与するとともに、経済社会や文化の発展に貢献することを目的とします。上記の目的を達成するため、大きく変貌する現代社会システムの諸問題を理論的・実証的に分析し、常に環境問題に関心をもち、国際感覚が豊かで産業社会に要請される情報処理能力や実践的・創造的能力とシステムの思考力、さらに経済・経営・法律・生産システム科学の専門知識に基づくマネジメント力を備え、グローバルな経済社会の発展に貢献できる優れた企画・政策立案能力をもった人材を育成します。

したがって、マネジメント学類では、次のような学生を求めています。

- 1.社会経済、企業経営および生産システムに関心のある人
- 2.経済学、経営学、会計学、法学、生産システム科学の5分野を総合的に勉強したい人
- 3.論理的思考力と自ら学ぶ探求心を備え、勉学意欲に溢れる人
- 4.国際的視野をもち、外国語能力に優れ、国際社会・地域社会に貢献することをめざす人

以上にに基づき、次の1～5の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること
- 3.データを使い分析するための基礎的な数学の知識を身につけていること
- 4.論理的な思考力と日本語による高い表現能力を備えていること
- 5.他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。また、基礎的な数学的素養を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。さらに、論理的な思考力および日本語による高い表現能力を備えていることを、個別学力検査の英語、数学によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力、基礎的な数学的素養、論理的な思考力および日本語による高い表現能力を備えていることを、大学入学共通テストの外国語（英語）、数学、国語によって評価します。さらに、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、活動報告書、調査書、推薦書によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。また、基礎的な数学的素養を有していることを、日本留学試験の数学によって評価します。さらに、論理的な思考力および日本語による高い表現能力を備えていることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、口頭試問・面接によって評価します。

マネジメント課程

○教育目的

経営のグローバル化に対応するため、社会科学およびその他の諸科学にいたる幅広い基礎知識と、経営、会計、法律、生産システム科学の専門知識にもとづき、マネジメントに関する諸問題を理論的・実証的に分析し、問題解決や企画立案を行う能力を持った人材を育成する。

○教育目標

- 1.経営学や経済学をはじめとする社会科学、およびその他の諸科学にいたるまでを基礎から幅広く学修し、教養を身に付ける。また、倫理観や社会的な責任観の重要性を学習し、身に付ける。
- 2.経営、会計、法律、生産システム科学の専門的な知識や技術を体系的に理解・習得し、問題を解決できるマネジメント能力を身に付ける。
- 3.コミュニケーションが求められる場面で、自分の考えを論理的に表現し、他人の意見も理解し討論できるような能力を身に付ける。
- 4.自ら学修目標・達成目標をたて、自主的に学習する能力を身に付ける。また、グループやプロジェクトでの学習・研究活動をマネジメントし遂行する能力を身に付ける。

経済データサイエンス課程

○教育目的

本課程では、グローバル化や少子高齢化の進展、各種の技術革新といった現代社会の様々な問題や環境変化に対応するため、経済理論とデータ分析から導き出された科学的根拠に基づき、金融・ビジネスならびに公共部門で企業戦略、経済政策、社会政策の立案とその適切な評価ができる人材を育成する。これにより、経済・経営の専門知識とデータ分析能力を活用した、持続可能な経済社会を創造することを目標とする。

○教育目標

1.社会経済状況の理解力・問題認識力の養成：

社会制度、経済制度、財政制度、経済学説・思想、ならびに社会の様々な問題について、これらの変遷と現況、そして将来展望を学ぶ。これにより、経済社会の成り立ちと構造を理解する力、さらにそれらに基づき、家計や企業、社会が直面している問題を把握する力を養う。

2.論理的思考力・分析力（経済理論による定性的な分析能力）の養成：

現代社会においては、国際機関、国、地方政府、企業、家計、個人などの各経済主体が、それぞれが直面する制約の下で自らの目標を達成しようと行動しており、かつ、これら主体の意思決定は市場の内部と外部で相互に影響を与え合っている。そこで、こうした社会経済のメカニズムを俯瞰し、インセンティブの観点から論理的に思考・分析する力を養う。

3.問題解決能力（データによる定量的な分析能力）の養成：

上記1、2を通じて修得した各能力に立脚し、様々な統計データに基づいて、社会経済の構造と物事の因果関係を定量的に分析し、説明するスキルを学ぶ。これにより、データ分析から得られた科学的根拠に基づき、経済社会と個別経済主体の将来の姿を予測し、効果的な企業戦略や政策の提言を行う力を養う。

工学域

○教育目的

工学域は、科学と技術の融合領域である工学において、真理の探究と知の創造を重視し、自然環境と調和する科学技術の発展を図り、持続可能な社会の発展と文化の創造に貢献することをその基本の理念とします。この理念のもとで教育を実践し、幅広い総合的知識および工学分野の専門知識に基づいて問題を認識し、評価し、解決する基本的な能力を培い、創造性と個性を有し、豊かな教養、高い倫理観と専門能力を兼ね備えた人材を育成します。

○教育目標

工学域においては、次の項目を具体的な達成目標とします。

- ・豊かな教養をもち、工学が、自然、環境、社会、歴史、人間、文化とどのような関係にあるかを深く理解します。
- ・工学の専門知識と技術を体系的に学び、応用できます。
- ・日本語で科学・技術上の文章を、読み、書くことができ、論理的・科学的な議論ができます。
- ・技術者として、国際社会で活躍するのに必要な英語による論理的な記述力、口頭発表力、討議などのコミュニケーション基礎能力をもちます。
- ・科学・技術を利用することにより、対象を論理的・科学的に分析することができます。
- ・インターネットなどを用いて多種多様な科学・技術の情報を、収集・分析し、判断することができます。
- ・科学・技術を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力（デザイン能力）をもちます。
- ・科学・技術が社会と自然に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもちます。
- ・科学・技術の知識を、生涯に渡って、自主的、継続的に学習・習得する能力を身に付けます。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

真理の探究と知の創造を重視し、自然環境と調和する科学技術の発展を図り、持続可能な社会の発展と文化の創造に貢献することをその基本の理念とする。この理念のもとで教育を実践し、幅広い総合的知識および工学分野の専門知識に基づいて問題を認識し、評価し、解決する基本的な能力を培い、創造性と個性を有し、豊かな教養、高い倫理観と専門能力を修得した者に学位を授与する。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

- ・「大阪府立大学学士課程が目指す学修成果」の達成を目的として、教育課程編成を行う。

- ・工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重し、共通教育科目、専門基礎科目および専門科目（学域共通科目、学類共通科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

- ・学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。特に学域共通科目と学類共通科目を適切に配置し、転学類・転課程が可能になるようなカリキュラム編成により、幅広い学修と柔軟な進路変更を可能とする。

- ・共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を獲得させる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基盤的知識を修得させる。専門科目の中でも、特に学類全体で必要とされる科目を学類共通科目に指定する。同様に学類を問わず幅広く必要とされる科目を学域共通科目に指定する。

- ・基礎学力を重視するために専門基礎科目を履修させ、専門科目の基礎となる数学や自然科学を学修することにより、生涯に渡る学びの基礎を築かせる。

- ・1年次では、幅広い学修を保証し、豊かな教養を涵養するために必要な共通教育科目を中心に配当し、2年次では、初年次で得られた基礎的で幅広い学修成果を3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的に、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当し、3年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、専門分野に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

- ・成績評価の基準は以下のとおりとする。

1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた

基準に沿って、A+から D の評語で評価する。特に、単位修得（C 以上）の基準を到達度として明記する。

2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善をはかる。

3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善をはかる。

・成績評価の方法は以下のとおりとする。

1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組みあわせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。

2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。"

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

工学域は、かつての自由都市堺に立地し、その伝統的気風、すなわち「自由と進取の気風、新しい文化と産業の創造、世界雄飛」をモットーに、真理の探究と知の創造を重視し、自然環境と調和する科学技術の進展を図り、持続可能な社会の発展と文化の創造に貢献することをめざしています。

このために、人と社会と自然に対する広い視野と深い知識をもち、豊かな人間性と高い倫理観および専門能力を兼ね備え、工学における重要な課題を主体的に認識して問題の解決に努め、社会の発展、福祉の向上および文化の創造に貢献できる技術者・研究者を育てることを目標にしています。

したがって、工学域では、学問を深く継続して学ぶ意欲に富み、人や自然を愛し、人類の持続可能な発展と世界平和に関わる未知の問題に果敢に立ち向かい、地球環境を守るという気概をもつ、次のような学生を求めています。

- 1.工学を学ぶことに対する目的意識を明確にもち、社会の発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.自由闊達で何事にも興味をもち、主体的、積極的に学び自ら新たな課題を見つけ研究をしていこうとする人
- 3.工学的諸問題への強い関心と、問題解決への目標意識をもっている人

以上のような、工学域の教育理念・目的にふさわしい次の1～4の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.工学における諸課題に取り組むための基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を身につけていること
- 3.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること
- 4.論理的に考える素養を身につけていること

電気電子系学類

○教育目的

今日の社会はグローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会へと革新的に移行し続けている。このような情報と通信の劇的な変化に柔軟に対応し、豊かな社会を築くため、情報工学、知能工学、電気工学、電子工学、通信工学、システム工学、応用物理学、応用数理科学を基礎として、最先端の情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、および電子物理工学の教育を行うことにより、システム設計能力、情報活用能力、応用物理学と応用数理科学の応用能力、そして幅広い視野と豊かな人間性、深い教養と厳格な倫理観をもった国際的に活躍できる研究者・技術者を育成する。

○教育目標

- 1.豊かな教養を身に付けることにより、情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかについて、自然や環境、社会や文化とどのような関係をもっているかを、理解することができる。
- 2.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかについて、専門知識と技術を体系的に学び、応用できる。
- 3.日本語で、情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかについて、文章を、読み、書くことができ、科学的論理的な議論ができる。
- 4.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかについて、英語を用いて論理的な文章を書き、口頭発表し、討議することができる。
- 5.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかを利用することにより、社会の様々な問題を工学的手法を用いて分析することができる。
- 6.インターネットなどを用いて、情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかについて、科学技術についての情報を収集し、分析し、判断することができる。
- 7.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかを利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力をもつ。
- 8.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかが社会

に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもつ。

9.情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学のいずれかの知識を、生涯に渡って、自主的、継続的に学習する能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

電気電子系学類（情報工学課程、電気電子システム工学課程、数理システム課程、電子物理工学課程）は、本学類のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる次の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.電気電子系学類の専門領域において、自然や環境、社会や文化とどのような関係をもっているかを、理解することができる。
- 2.電気電子系学類の専門知識と技術を体系的に身に付け、応用できる。
- 3.日本語で、電気電子系学類に関連する文章を、読み、書くことができ、科学的論理的な議論ができる。
- 4.英語を用いて論理的な文章を書き、口頭発表し、討議することができる。
- 5.電気電子系学類に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を工学的手法を用いて分析することができる。
- 6.インターネットなどを用いて、電気電子系学類の専門に関する情報を収集し、分析し、判断することができる。
- 7.電気電子系学類に関する専門知識と技術を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力がある。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観がある。
- 9.電気電子系学類の専門分野について、生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力がある。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

- 1.大阪府立大学工学域のカリキュラムポリシーのもと、教育課程編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目、並びに専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.学生の電気電子系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を修得させる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させる。専門科目の中でも、特に電気電子系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。
- 5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4 年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、電気電子系学類で学ぶ学問全般を理解するため、「電気電子系学類総論（必修）」を配当し、情報工学、電気電子システム工学、数理システム、電子物理工学の 4 課程全般について概論的な講義を行い、2 年次以降に学習する専門科目と専門基礎科目との接続を円滑にするとともに課程配属先を決定するための判断材料を提供する。
- 6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3 年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また電気電子系学類で学ぶ学問分野全般を俯瞰する視点を獲得し、3 年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2 年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2 年次から 3 年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。
- 7.3 年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、電気電子系学類に関する問題解決に応用できる能力を育成する。
- 8.4 年次には卒業研究（6 単位）を必修とし、電気電子系学類における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.電気電子系学類の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

今日の社会はグローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会へと革新的に移行し続けています。電気電子系学類では、このような情報と通信の劇的な変化に柔軟に対応し、豊かな社会を築くため、最先端の情報工学、電気電子システム工学、および電子物理工学の教育研究を行うことにより、システム設計能力、情報活用能力、物理学の応用能力、そして、幅広い視野と豊かな人間性、深い教養と厳格な倫理観をもった国際的に活躍できる技術者・研究者を育てることを目標にしています。

したがって、電気電子系学類では、次のような学生を求めています。

- 1.情報工学、電気電子システム工学、電子物理工学に対する強い関心があり、専門知識と技術を体系的に学び、応用し、社会の発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.論理的な思考力と豊かな創造力の獲得をめざし、勉学意欲に溢れる人
- 3.外国語能力に優れ、国際的視野をもって社会に貢献することをめざす人
- 4.高い倫理観をもって課題解決に意欲的に取り組む人

以上に基づき、次の1～3の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.工学における諸課題に取り組むための基礎的な数学の素養、物理学の素養および情報の素養を身につけていること
- 3.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること

一般選抜（中期日程）

高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科において評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語において評価します。

帰国生徒特別選抜

電気電子系学類に必要な素養を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、小論文、面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。

外国人留学生特別選抜

電気電子系学類に必要な素質を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、小論文、口頭試問・面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、日本留学試験の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。

情報学課程

○教育目的

知識情報処理システム、知能化システム、情報通信ネットワークシステムなど情報処理技術の飛躍的な発展は、社会構造ならびに我々の生活様式に革新的な変革を引き起こしつつあります。情報工学課程では、情報を高度に活用する技術を開発し豊かな未来社会を築くために、情報処理技術に関するハードウェアでの実現から応用面までにわたる基礎的知識およびその应用能力を身に付け、幅広い人間性と倫理観をもった人材を育成します。

○教育目標

学類共通の教育目標に加え、以下の教育目標を掲げます。

- 1.情報・知能科学の基礎知識とそれらを応用できる能力を身につけます。
- 2.情報・知能分野の専門知識を深く修得するとともに、それらを応用できる能力を身につけます。
- 3.社会的なニーズを分析して新たな問題を自ら見つけだし、モデル化・定式化するとともに、得られた結果をシステムやソフトウェアの要求仕様の形で表現し、解決するデザイン能力を養います。
- 4.与えられた条件下で計画的に仕事を進め、まとめる管理能力を育てます。

○ディプロマ・ポリシー

情報工学課程は、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標に掲げる以下の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.情報工学が、自然や環境、社会や文化とどのような関係をもっているかを、理解することができる。
- 2.情報工学の専門知識と技術を体系的に身に付け、応用できる。
- 3.日本語で、情報工学に関連する文章を、読み、書くことができ、科学的論理的な議論ができる。

- 4.情報工学について、英語を用いて論理的な文章を書き、口頭発表し、討議することができる。
- 5.情報工学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を、工学的手法を用いて分析することができる。
- 6.インターネットなどを用いて、情報工学の専門に関する情報を収集し、分析し、判断することができる。
- 7.情報工学に関する専門知識と技術を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力をもつ。
- 8.情報工学が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもつ。
- 9.情報工学について、生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。
- 10.情報・知能科学の基礎知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。
- 11.情報・知能分野の専門知識を深く修得するとともに、それらを応用できる能力を身に付けている。
- 12.社会的なニーズを分析して新たな問題を自ら見つけだし、モデル化・定式化するとともに、得られた結果をシステムやソフトウェアの要求仕様の形で表現し、解決するデザイン能力をもつ。
- 13.与えられた条件下で計画的に仕事を進め、まとめる管理能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.大阪府立大学工学域のカリキュラム・ポリシーのもと、教育課程の編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.学生の電気電子系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を修得させる。専門基

基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基盤的知識を修得させる。専門科目の中でも、特に電気電子系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、電気電子系学類で学ぶ学問全般を理解させるため、「電気電子系学類総論（必修）」を配当し、情報工学、電気電子システム工学、数理システム、電子物理工学の4課程全般について概論的な講義を行い、2年次以降に学習する専門科目と専門基礎科目との接続を円滑にするとともに課程配属先を決定するための判断材料を提供する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また電気電子系学類で学ぶ学問分野全般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。これにより、情報・知能科学の基礎知識とその応用力を養う。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、情報・知能分野の専門知識を獲得し、それを問題発見、問題解決、モデル化・定式化に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、情報工学における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。これにより、与えられた条件下での仕事の管理能力を獲得する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.情報工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。

電気電子システム工学課程

○教育目的

国際化・情報化に対応できる能力と広い視野および高い倫理観を培うとともに、電気システム、情報通信、およびシステム設計・運用法に関する技術を幅広く修得させ、豊かな人間性と柔軟な創造力をもって問題解決に取り組んでいける人材を育成する。

○教育目標

電気電子システム工学課程では、次の能力・姿勢を身に付けた人材を育成することを教育目標とする。

- 1.電気電子システム工学について、基礎知識、専門知識と技術を体系的に学び、応用できる。
- 2.電気系・システム系・情報通信系の専門的知識を幅広く身に付け、応用できる。
- 3.与えられた制約の下で実験を計画・遂行し、データを適切な方法で取得し、正確に分析し評価するとともに、工学的に考察する能力を身に着けている。
- 4.日本語で、電気電子システム工学について、文章を、読み、書くことができ、科学的論理的な議論ができる。
- 5.電気電子システム工学に関する英語の文献を理解し、英語を用いて論理的な文章を記述する能力の基礎を身に着けている。
- 6.電気電子システム工学について、英語を用いて論理的な文章を書き、口頭発表し、討議することができる。
- 7.電気電子システム工学を利用することにより、社会の様々な問題を工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.プログラミングの基礎知識を身に付け、課題解決のためのアルゴリズムの創造能力、プログラミング能力を身に着けている。
- 9.インターネットなどを用いて、電気電子システム工学について、科学技術についての情報を収集し、分析し、判断することができる。
- 10.電気電子システム工学を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力がある。

11.電気電子システム工学が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観がある。

12.電気電子システム工学の知識を、生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。

○ディプロマ・ポリシー

電気電子システム工学課程は、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる以下の能力を身に付け、所定の単位を修得した学生に学士（工学）の学位を授与する。

1.電気電子システム工学について、自然や環境、社会や文化とどのような関係をもっているかを、理解することができる。

2.電気電子システム工学について、基礎知識、専門知識と技術を体系的に身に付け、応用できる。

3.電気系・システム系・情報通信系の専門的知識を幅広く身に付け、応用できる。

4.与えられた制約の下で実験を計画・遂行し、データを適切な方法で取得し、正確に分析し評価するとともに、工学的に考察する能力を身に付けている。

5.日本語で、電気電子システム工学について、文章を、読み、書くことができ、科学的論理的な議論ができる。

6.電気電子システム工学に関する英語の文献を理解し、英語を用いて論理的な文章を記述する能力の基礎を身に付けている。

7.電気電子システム工学について、英語を用いて論理的な文章を書き、口頭発表し、討議することができる。

8.電気電子システム工学を利用することにより、社会の様々な問題を工学的手法を用いて分析することができる。

9.プログラミングの基礎知識を身に付け、課題解決のためのアルゴリズムの創造能力、プログラミング能力を身に付けている。

10.インターネットなどを用いて、電気電子システム工学について、科学技術についての情報を収集し、分析し、判断することができる。

11.電気電子システム工学を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力がある。

12.電気電子システム工学が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観がある。

13.電気電子システム工学の知識を、生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

1.大阪府立大学工学域のカリキュラム・ポリシーのもと、教育課程の編成を行う。

2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

3.学生の電気電子系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。

4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を修得させ、自然や環境、社会や文化と専門領域の関連を修得させる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させる。専門科目の中でも、特に電気電子系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定し、これらにより科学的論理的な議論ができる基礎能力を修得させる。

5.1 年次では、幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、電気電子系学類で学ぶ学問全般を理解させるため、「電気電子系学類総論（必修）」を配当し、情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学の4分野全般について概論的な講義を行い、2年次以降に学習する専門科目と専門基礎科目との接続を円滑にするとともに課程配属先を決定するための判断材料を提供し、基礎的な技術等を修得させる。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また電気電子系学類で学ぶ学問分野全

般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を修得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を修得させる。

7.3年次以降では、電気電子システム工学課程の専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習、特に後期には少人数チームによる課題解決型の実験を配し、電気電子系分野に関するさまざまな問題を工学的に分析し、問題解決を図る創造性能力を修得させる。さらに、「工学域インターンシップ」や産業界の専門職の方を講師とした「エンジニアのためのキャリアデザイン」の配当し、学生自らのキャリアデザイン能力を修得させる。

8.4年次には卒業研究（6単位）を必修とし、電気電子システム工学分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を修得させる。卒業研究履修には履修資格を設ける。また、電気電子システム課程の専門領域に関する「電気電子システム工学技術英語（必須）」を配当し、英語でのコミュニケーション能力を修得させる。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.電気電子システム工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。"

電子物理工学課程

○教育目的

グローバル情報化社会の要請に応えて、情報通信技術を支える電子デバイスは、さらなる高度化、高機能化が求められています。電子工学はその中核としてきわめて広範囲に高度専門化し、さらなる発展には確固たる物理的基礎に立脚した、より独創的な発想が強く要請されています。このような状況を踏まえ、電子物理工学課程は従来の電子工学の範疇より一層、基礎的、物理的側面に力点を置いた教育を行い、幅広い物理的視野と電子技術の素養をもった、高い創造性を発揮できる人材を育成します。

○教育目標

学類共通の教育目標に加え、以下の教育目標を掲げます。

1. 専門技術者として社会への貢献と責任について考える倫理観を養います。
2. 専門技術者として自立して活動でき、自ら問題を設定し解決できる能力を養います。
3. 数学、自然科学、情報科学などに関する基礎知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養います。
4. 物理学と電子工学の基礎と専門技術に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養います。
5. 正しい日本語によるコミュニケーション能力とともに、国際的な活動に必要な英語によるコミュニケーションの能力を養います。
6. 自主的、継続的に学習し、社会や技術の変化や進歩に適切に対応でき、常に第一線で活躍できる能力を養います。

○ディプロマ・ポリシー

電子物理工学課程は、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる以下の能力を身に付け、所定の単位を修得した学生に学士（工学）の学位を授与する。

1. 幅広い視野と豊かな人間性、深い教養を身に付けている。

- 2.専門技術者として社会への貢献と責任について考える倫理観を身に付けている。
- 3.専門技術者として自立して活動でき、自ら問題を設定し解決することができる。
- 4.数学、自然科学、情報科学などに関する基礎知識を修得し、問題解決に応用できる。
- 5.電子工学、数理物理工学とそれに関連する物理学の基礎と専門技術に関する知識を修得し、問題解決に応用できる。
- 6.与えられた制約の下で実験および解析を計画・遂行し、データを適切な方法で取得し、正確に分析して評価するとともに、工学的に考察する能力を発揮することができる。
- 7.日本語で、電子物理工学に関する文章を、読み、書くことができ、科学的かつ論理的な議論ができる。
- 8.国際的な活動に必要な英語によるコミュニケーションの能力を修得している。
- 9.自主的、継続的に学習し、社会や技術の変化や進歩に適切に対応でき、常に第一線で活躍できる能力を備えている。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.大阪府立大学工学域のカリキュラム・ポリシーのもと、教育課程の編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基礎科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.学生の電気電子系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を修得させ、自然や環境、社会や文化と専門領域の関連を修得させる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させる。専門科目の中でも、特に電気電子系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定し、これらにより科学的論理的な議論ができる基礎能力を修得させる。
- 5.1年次では、幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、電気電子系学類で学ぶ学問全般を理解させるため、「電気電子系学類

総論（必修）」を配当し、情報工学、電気電子システム工学、数理システム工学、電子物理工学の4分野全般について概論的な講義を行い、2年次以降に学習する専門科目と専門基礎科目との接続を円滑にするとともに課程配属先を決定するための判断材料を提供し、基礎的な技術等を修得させる。

6.2年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また電気電子系学類で学ぶ学問分野全般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を修得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。これにより、電子物理工学の基礎知識とその応用力を養う。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を修得させる。

7.3年次以降では、電子物理工学課程の専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、電子物理に関するさまざまな問題を工学的に分析し、問題解決を図る創造能力を修得させる。特に学生相互が意見を交換し合うことで、電子物理工学の諸問題に対する応用・展開能力を養成することを企図する。さらに、「工学域インターンシップ」や産業界の専門職の方を講師とした「エンジニアのためのキャリアデザイン」の配当し、学生自らのキャリアデザイン能力を修得させる。

8.4年次には卒業研究（6単位）を必修とし、電子物理工学における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を修得させる。卒業研究履修には履修資格を設ける。また、電子物理工学課程の専門領域に関する「電子物理工学外国語演習（必須）」を配当し、英語でのコミュニケーション能力を修得させる。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.電子物理工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。"

物質化学系学類

○教育目的

人類社会の持続的発展には、人と環境に優しい新素材の開発、および限りある資源の有効かつ循環的な活用が不可欠である。それを可能にする新しい物質の科学と技術を創造し、地球環境と調和した豊かな社会の構築に貢献する、優れた専門職業人（技術者・研究者）を育成する。

○教育目標

- 1.豊かな教養を身につけることにより、物質・化学（応用化学、化学工学、マテリアル工学のいずれか）に関する専門能力を備えた人材として社会において果たす役割を認識することができる。
- 2.物質・化学に関する専門知識と技術を体系的に学び、それらを工学に応用できる。
- 3.日本語で、物質・化学の専門に関する文章を読み、書くことができ、科学的・論理的な議論ができる。
- 4.英語による、論理的な記述力、口頭発表力、討議などの国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と表現能力を身に付けている。
- 5.物質・化学に関する専門知識を生涯に渡って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。
- 6.インターネットなどを用いて物質・化学の専門に関する情報を収集・分析し、その価値判断をすることができる。
- 7.物質・化学に関する専門知識を利用することにより、対象とする事柄について工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもっている。
- 9.物質・化学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力を身に付けている。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

物質化学系学類（応用化学課程、化学工学課程、マテリアル工学課程）では、本学類のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる次の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.物質・化学（応用化学、化学工学、マテリアル工学のいずれか）に関する専門能力を備えた人材として社会において果たす役割を認識することができる。
- 2.物質・化学に関する専門知識と技術を体系的に身に付け、それらを工学に応用できる。
- 3.日本語で、物質・化学の専門に関する文章を読み、書くことができ、科学的・論理的な議論ができる。
- 4.英語による、論理的な記述力、口頭発表力、討議などの国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と表現能力を身に付けている。
- 5.物質・化学に関する専門知識を生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。
- 6.インターネットなどを用いて物質・化学の専門に関する情報を収集・分析し、その価値判断をすることができる。
- 7.物質・化学に関する専門知識を利用することにより、対象とする事柄について工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもっている。
- 9.物質・化学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

- 1.「物質化学系学類、および応用化学課程、化学工学課程、マテリアル工学課程の教育目標」の達成を目的として、教育課程編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目および専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

3.学生は物質化学系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。

4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯に亘る学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に物質化学系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、1年次前期に「物質化学系学類概論（必修）」を配当し、物質化学系の最先端研究を紹介するとともに各課程の特色を理解させ、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また、物質化学系学類で学ぶ学問分野全般を俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、物質化学系分野に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、物質化学系分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.物質化学系学類の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

人類社会の持続的発展には、人と環境にやさしい新素材の開発、および限りある資源の有効かつ循環的な活用が不可欠です。物質化学系学類では、これを可能にする新しい物質の科学と技術を創造し、地球環境と調和した豊かな社会の構築に貢献できる優れた技術者・研究者を育てることを目標にしています。

したがって、物質化学系学類では次のような学生を求めています。

- 1.新しい物質の科学と技術に対する強い関心があり、地球環境と調和した豊かな社会の発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.論理的な思考力と豊かな創造力の獲得をめざし、勉学意欲に溢れる人
- 3.外国語能力に優れ、国際的視野をもって社会に貢献することをめざす人
- 4.高い倫理観をもって課題解決に意欲的に取り組む人

以上にに基づき、次の1～3の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.物質化学における諸課題に取り組むための基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を身につけていること
- 3.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること

一般選抜（中期日程）

高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科において評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語において評価します。

帰国生徒特別選抜

物質化学系学類に必要な素養を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、小論文、面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。

外国人留学生特別選抜

物質化学系学類に必要な素養を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、小論文、口頭試問・面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、日本留学試験の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。

応用化学課程

○教育目的

化学の基礎と応用に関する幅広い知識と確かな技術、そして豊かな人間性と深遠な倫理観を併せもつ活力のある化学技術者を育成します。

○教育目標

- 1.化学技術者としての常識、教養、倫理観を身につけさせ、人類の福祉という高い観点から化学の役割を考え、化学技術者の使命と責任を自覚できる能力を養います。
- 2.化学全般を支える基礎科目として、無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、高分子化学を徹底して修得させ、新しい化学技術や物質を創造できる能力を養います。
- 3.化学物質と化学反応の本質を理解・体験し、技術的能力を修得させるために、実験の計画・立案、実行、データ整理、考察、成果発表の能力を身につけさせます。
- 4.基礎科学としての数学と物理学並びに情報・通信の基礎となる情報処理学的能力を身につけさせ、化学の定量的な理解に活かす能力を養います。
- 5.分子軌道理論など、計算機化学の発展に対応できる能力を育成するとともに、量子化学的理解を基盤とした機能性物質・材料の設計能力を養います。
- 6.日本語による論理的な記述力を中心とするコミュニケーション能力、国際的な場で必要な英語の読解・記述並びに会話によるコミュニケーション能力を養います。
- 7.危険物の取扱い、廃棄物の処理、環境問題に対処できる知識と実務能力を養います。
- 8.研究のための情報収集、研究計画、実行、発表（プレゼンテーション）の能力を養い課題探求型技術者を養成します。"

○ディプロマ・ポリシー

応用化学課程では、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる以下の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.応用化学に関する専門能力を備えた人材として社会において果たす役割を認識すること

ができる。

- 2.応用化学に関する専門知識と技術を体系的に身に付け、それらを工学に応用できる。
- 3.日本語で、応用化学に関する文章を読み、書くことができ、科学的・論理的な議論ができる。
- 4.英語による、論理的な記述力、口頭発表力、討議などの国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と表現能力を身に付ける。
- 5.応用化学に関する専門知識を生涯に渡って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。
- 6.インターネットなどを用いて応用化学に関する情報を収集・分析し、その価値判断をすることができる。
- 7.応用化学に関する専門知識を利用することにより、対象とする事柄について工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観を身に付けている。
- 9.応用化学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.「物質化学系学類の教育目的および応用化学課程の教育目標」の達成を目的として、教育課程を編成する。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.学生の物質化学系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯にわたる学びの基礎を築かせる。専門科目の中でも、

特に物質化学系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目(物質化学系学類概論、物理化学序論、無機化学序論)に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を涵養するため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築させるため、専門基礎科目を適切に配当する。例えば、応用化学課程に必要な数学・物理学・化学に関する必修科目を中心に配当する。また、1年次前期に「物質化学系学類概論（必修）」を配当し、物質化学系の最先端研究や各課程の特色を理解させることにより、2年次以降の所属課程を考える機会を持たせる。他にも基礎的専門科目として重要な「物理化学序論」を配当する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目(例えば、常微分方程式、物理学 A など)と応用化学課程の基礎的な専門科目(例えば、分析化学 A、有機化学 I A など)を中心に配当する。また、物質化学系学類で学ぶ学問分野全般を、講義・実験・実習・演習などを通して俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、技術者・研究者としての倫理観を涵養するため、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当する。

7.3 年次以降では、応用化学課程の専門科目(例えば、物理化学ⅢA、高分子化学Ⅱなど)を中心に配当する。また、実験（応用化学実験Ⅲ～Ⅴ）・実習（工学域インターンシップ）・演習（物理化学演習ⅡA、有機化学演習ⅡA）などを通して、物質化学系分野、特に応用化学に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、応用化学における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.応用化学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。"

化学工学課程

○教育目的

資源循環を総合的に含む化学プロセスの構築を基本理念とした化学工学について基礎的な幅広い専門知識を習得し、それらを統合して循環型社会の要請に応え得る応用力を備えた化学技術者を育成します。また、社会的にも広い視野と倫理観をもち、国際的にも活躍できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.工学だけでなく、自然科学、さらには人文・社会科学に至るまでを幅広く学習し、グローバルな視点から物事を考えることができる。
- 2.科学技術が社会および自然環境に及ぼす影響・効果の大きさを認識し、社会に対する技術者の責任の重さについて理解し、自覚できる。
- 3.化学、物理学、数学、および情報処理などに関する十分な基礎知識を理解でき、使うことができる。さらに、各種生産プロセスを定量的に把握するための基礎知識となる物質収支、エネルギー収支、移動速度論の考え方が理解できる。
- 4.化学的、物理的、生物的各プロセスや、それらの複合プロセスの基礎となる各種素過程の平衡論的、速度論的な解析ができる。
- 5.資源循環を考慮した物質やエネルギーの生産プロセスの設計や最適化法を理解できる。
- 6.化学工学の広範な問題を解決するために必要な調査・研究の手法が理解できる。
- 7.論理的な記述および明解なプレゼンテーションができ、英語の学術論文を読解することができる。
- 8.自主的、継続的、計画的に取り組み、期限内に成果をまとめることができる。

○ディプロマ・ポリシー

化学工学課程では、化学工学課程のカリキュラムに沿って、次の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.化学工学課程に関する専門能力を備えた人材として社会において果たす役割を認識することができる。
- 2.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもって行動できる。
- 3.日本語で、物質化学、特に化学工学の専門に関する文章を読み、書くことができ、科学的・論理的な議論ができる。
- 4.英語による、論理的な記述力、口頭発表力、討議などの国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話および表現ができる。
- 5.物質化学、特に化学工学に関する専門知識を生涯にわたって、自主的、継続的に、計画的に学習することができる。また、学習したことを使って課題の解決方法を期限までに提示できる。
- 6.インターネットなどを用いて物質化学の専門に関する情報を収集・分析し、その価値判断をすることができる。
- 7.物質化学、特に化学工学に関する専門知識を利用することにより、対象とする事柄について工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもっている。
- 9.物質化学、特に化学工学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を解決することができる。

○カリキュラム・ポリシー

化学工学課程の学位授与に必要とされる能力（ディプロマ・ポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各講義科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価し、各実験・実習・演習科目については、筆記試験、レポート、授業への取り組み、発表等により評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

- 1.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・

一貫性を持つ体系化された教育課程を配置する。

2. 学生が物質化学系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。

3. 共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯にわたる学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に物質化学系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目(物質化学系学類概論、物理化学序論)に指定し配置する。

4.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目(例えば、外国語科目、情報基礎科目など)を中心に配置する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目(例えば、微積分学Ⅰ、Ⅱ、線形数学Ⅰ、Ⅱなど)を適切に配置する。また、1年次前期に「物質化学系学類概論(必修)」を配置し、物質化学系の最先端研究を紹介するとともに各課程の特色を理解させ、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

5.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目(例えば、常微分方程式、物理学Aなど)と化学工学課程の基礎的な専門科目(化学工学分野論、化学工学熱力学など)を中心に配置する。また、物質化学系学類で学ぶ学問分野全般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目を適切に配置する。さらに、2年次から3年次にかけて、技術者・研究者としての倫理観を涵養するため「工学倫理(必修)」、「環境倫理(必修)」を配置する。

6.3 年次以降では、化学工学課程の専門科目(例えば、粉体工学Ⅰ、プロセス制御学など)を中心に配置し、講義(化学工学特殊講義Ⅰ、Ⅱ)・実験(化学工学実験Ⅰ、Ⅱ)・実習(工学域インターンシップ)・演習(化学工学演習Ⅰ、Ⅱ)などを通して、特に化学工学に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

7.4 年次には卒業研究(6単位)を必修とし、化学工学における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

8. 成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

9.物質化学系学類および化学工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示し、卒業時に取得可能な資格や免許の受験資格を明示する。

マテリアル工学課程

○教育目的

材料の科学と工学の基礎概念と学理を理解し、科学的基礎に基づいたものづくりに必要な材料設計理論、素材の合成技術、組織観察技術、物性や構造の評価解析技術を身につけた、社会の高度化を担う国際性豊かな創造力溢れる人材を育成します。

○教育目標

- 1.社会におけるマテリアル工学の位置付けを理解し、それを支える材料として、金属材料、半導体材料、セラミックス材料、ポリマー材料などの開発研究の重要性を理解させる。
- 2.マテリアル工学全般を支える基礎科目として、電子、原子、分子における物理学、化学を習得することができる。
- 3.材料の構造・組織を観察・解析できるとともに、機械的ならびに機能的性質を評価し、応用することができる。
- 4.各学年でマテリアル工学学生実験を行い、実験を自ら計画・遂行するとともに、結果を考察し、かつ説明することができる。
- 5.国際的な活動に必要な英語を中心とする外国語の会話・読解ができる。
- 6.卒業研究を通じて、マテリアル工学に関する研究課題を自ら設定し、それを遂行して解決し、成果を論文としてまとめ、発表・討論することができる。
- 7.技術者、研究者として社会への貢献と責任について考え、自立して行動し、自ら課題を設定し、解決することができる。
- 8.マテリアル工学の高度な教育研究のために、大学院工学研究科博士前期課程および後期課程におけるさらに専門的な講義と研究指導を受けるのに必要な知識を修得できる。

○ディプロマ・ポリシー

マテリアル工学課程では、マテリアル工学課程のカリキュラムに沿って、以下の能力を身

に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.マテリアル工学に関する専門能力を備えた人材として社会において果たす役割を認識することができる。
- 2.マテリアル工学に関する専門知識と技術を体系的に身に付け、それらを工学に応用できる。
- 3.日本語で、物質化学、特にマテリアル工学の専門に関する文章を読み、書くことができ、科学的・論理的な議論ができる。
- 4.英語による、論理的な記述力、口頭発表力、討議などの国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と表現能力を身に付けている。
- 5.物質化学、特にマテリアル工学に関する専門知識を生涯に亘って、自主的、継続的に学習する能力を身に付けている。
- 6.インターネットなどを用いて物質化学の専門に関する情報を収集・分析し、その価値判断をすることができる。
- 7.物質化学、特にマテリアル工学に関する専門知識を利用することにより、対象とする事柄について工学的手法を用いて分析することができる。
- 8.技術が社会に及ぼす影響を認識し、技術者が社会に対して負っている責任を自覚し、高い倫理観をもっている。
- 9.物質化学、特にマテリアル工学に関する専門知識を利用することにより、社会の様々な問題を解決するための創造能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

マテリアル工学課程の学位授与に必要とされる能力（ディプロマ・ポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各講義科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価し、各実験・実習・演習科目については、筆記試験、レポート、授業への取り組み、発表等により評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

- 1.「物質化学系学類の教育目的およびマテリアル工学課程の教育目標」の達成を目的として、教育課程を配置する。

2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目、ならびに専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

3.学生の物質化学系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択が可能である。

4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯に亘る学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に物質化学系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定し配置する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を涵養するために必要な共通教育科目を中心に配置する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。例えば、マテリアル工学課程に必要な数学・物理学・化学に関する必修を中心とする科目である。また、1年次前期に「物質化学系学類概論（必修）」を配置し、物質化学系の最先端研究や各課程の特色を理解させることにより、2年次以降の所属課程を考える機会を持たせる。他にも基礎的専門科目として重要な「物理化学序論」を配置する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目（数学と物理学の科目）と基礎的な専門科目（無機化学序論、物質の構造・組織、結晶構造解析、物質量子論）を中心に配置する。また、物質化学系学類で学ぶ学問分野全般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次にマテリアル工学課程の入門的な専門科目（社会・産業と材料）を配置する。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」と「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、マテリアル工学課程の柱となる材料物性・材料化学・材料組織・材料強度に関する専門科目を中心に配置し、講義・実験・実習・演習などを通して、マテリアル工学領域における問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）が必修であり、マテリアル工学分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設定する。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.マテリアル工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示す。

機械系学類

○教育目的

複雑化、多様化、複合化する現代社会の工学システム中で、特に、高機能化、知能化、システム化が求められる一般機械から航空機・宇宙機、船舶・海洋構造物・海洋資源環境の分野において、人と環境が共存・共生する機械システム、航空宇宙システム、海洋システムの確立をめざし、教育を実践する。その教育を通し、機械工学分野並びに航空宇宙工学分野および海洋システム工学分野の基盤的技術の有機的な連携により、これらの分野の重要な課題を主体的に認識し、その克服・解決を発想し得る豊かな素養、人間性、倫理観を育み、全地球的な視野から人類の持続可能な発展と地球環境の保全との調和をめざす先端的工学分野を開拓し、未来を担う人材を育成する。

○教育目標

- 1.数学、物理学、および情報科学に関する知識とそれらを工学に应用できる。
- 2.航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学のいずれかの専門知識と技術を体系的に学び、应用できる。
- 3.日本語で、航空宇宙工学、海洋システム工学、および機械工学のいずれかの文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、多面的に物事を考えることができる。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行うことができる（対話能力と自己表現能力）。
- 6.航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学のいずれかについて、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動ができる。
- 7.航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学のいずれかを利用して、社会の要求を解決できる（デザイン能力）。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学のいずれかについて、その応用を含む学問分野全般を学習できる。

9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

機械系学類（航空宇宙工学課程、海洋システム工学課程、機械工学課程）は、本学類のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる次の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.数学、物理学および情報科学に関する知識とそれらを工学に応用できる。
- 2.機械系学類（航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学）の専門知識と技術を体系的に工学に応用できる。
- 3.日本語等で、機械系学類に関連する文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、豊かな教養に基づき、多面的に物事を考えられる。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と自己表現能力を身に付けている。
- 6.機械系学類の専門領域において、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動ができる。
- 7.機械系学類の専門分野を利用して、社会の要求を解決するための創造能力（デザイン能力）を身に付けている。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に機械系学類の専門分野について、その応用を含む学問分野全般を学習できる。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

- 1.「機械系学類および航空宇宙工学課程、海洋システム工学課程、機械工学課程の教育目標」の達成を目的として、教育課程編成を行う。

2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目および専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

3.学生の機械系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。

4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯に亘る学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に機械系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、1年次に「機械及び航空宇宙海洋工学概論Ⅰ、Ⅱ（必修）」を配当し、機械系学系の最先端研究を紹介して各課程の特色を理解させるとともに、機械系学類の基礎力学科目の入門を講義し、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また、機械系学類で学ぶ学問分野全般を俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には基礎的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2年次では、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、機械系分野に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、機械系分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.機械系学類の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示す。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

複雑化、多様化、複合化する現代社会の工学システムの中で、特に、高機能化、知能化、システム化が求められている一般機械から航空機・宇宙機、船舶・海洋構造物・海洋資源環境の分野において、人と環境が共存・共生する航空宇宙システム、海洋システムおよび機械システムの確立が不可欠です。

機械系学類では、その教育を通し、航空宇宙工学分野および海洋システム工学分野並びに機械工学分野の基盤的技術の有機的な連携により、これらの分野の重要な課題を主体的に認識し、その克服・解決を発想し得る豊かな素養、人間性、倫理観を育み、全地球的な視野から人類の持続可能な発展と地球環境の保全との調和をめざす先端的工学分野を開拓し、未来を担う人材の育成をめざします。

したがって、機械系学類では、次のような学生を求めています。

- 1.航空宇宙工学、海洋システム工学、機械工学に対する強い関心があり、それらの分野および関連分野で、人と調和した豊かな社会の発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.論理的な思考力と豊かな創造力の獲得をめざし、勉学意欲に溢れる人
- 3.外国語能力に優れ、国際的視野をもって社会に貢献することをめざす人
- 4.高い倫理観をもって課題解決に意欲的に取り組む人

以上に基つき、次の1～3の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.一般機械から航空機・宇宙機、船舶・海洋構造物・海洋資源環境における諸課題に取り組むための基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を身につけていること
- 3.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を身につけていること

一般選抜（中期日程）

高等学校における教科・科目を広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科において評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語において評価します。

総合型選抜

高等学校における教科・科目を広く学習し、海洋システム工学を学習することに高い志を有していることを、志願書、調査書、適性検査、面接によって評価します。また、基礎的な数学、物理学の素養を有していることを、口頭試問において評価します。さらに、英語の基礎的な能力を有していることを、英語資格検定試験を用いて評価します。

帰国生徒特別選抜

機械系学類に必要な能力を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、小論文、面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、個別学力検査の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。

外国人留学生特別選抜

機械系学類に必要な能力を有していること、大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、小論文、口頭試問・面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、基礎的な数学の素養、物理学の素養および化学の素養を有していることを、日本留学試験の数学、理科によって評価します。さらに、英文を読解し、書いて表現する能力を有していることを、TOEFL または IELTS の成績によって評価します。"

航空宇宙工学課程

○教育目的

航空宇宙の専門分野を深く極めると同時に、全地球的な視野から物事を総合的に考える能力、およびシステムデザイン能力を育成するとともに、自主的、継続的に学習し、可能性を切り開く能力、精神を涵養し、未来を担う人材を育成します。

○教育目標

- 1.数学、物理学、及び情報科学に関する知識と有し、それらを工学に応用できる。
- 2.航空宇宙工学の専門知識（流体力学、推進工学、構造工学、誘導・制御工学、システム工学、宇宙環境利用工学の基礎）と技術を体系的に学び、それらを応用できる。
- 3.日本語で、航空宇宙工学の文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応でき、多面的に物事を考えることができる。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話ができ、自己表現できる。
- 6.航空宇宙工学が社会および自然に及ぼす影響や効果、および航空宇宙工学の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、倫理観に基づく判断・行動ができる。
- 7.航空宇宙工学の基礎および専門技術に関する知識を問題解決に応用し、システムデザインできる。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に航空宇宙工学について、その応用を含む学問分野全般を学習できる。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。

○ディプロマ・ポリシー

航空宇宙工学課程は、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる以下の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.数学、物理学及び情報科学に関する知識とそれらを工学に応用できる。
- 2.航空宇宙工学の専門知識と技術を体系的に工学に応用できる。航空宇宙工学の専門知識と技術とは、流体力学、推進工学、構造工学、誘導・制御工学、システム工学、宇宙環境利用工学に関する知識と技術を指す。
- 3.日本語等で、航空宇宙工学に関連する文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、豊かな教養に基づき、多面的に物事を考えられる。
- 5.国際的コミュニケーション能力が高く、異文化との交流を行う対話ができ、自己表現ができる。
- 6.航空宇宙工学の専門領域において、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動ができる。
- 7.航空宇宙工学の専門分野を利用して、社会の要求を解決するための創造（デザイン）ができる。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に航空宇宙工学の専門分野について、その応用を含む学問分野全般を学習できる。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.「機械系学類および航空宇宙工学課程の教育目標」の達成を目的として、教育課程の編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.機械系学類内の学生の航空宇宙工学課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けさ

せる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基礎的知識を修得させるとともに、生涯に亘る学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に機械系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、1年次に「機械及び航空宇宙海洋工学概論Ⅰ、Ⅱ（必修）」を配当し、機械系学系の最先端研究を紹介して各課程の特色を理解させるとともに、機械系学類の基礎力学科目の入門を講義し、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また、機械系学類で学ぶ学問分野全般を講義・実験・実習・演習などを通して、俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には基礎的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2年次では、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、機械系分野に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

8.航空宇宙工学特殊講義Ⅰ、Ⅱでは、企業などの技術者・研究者による講義を通して、産業界で活躍しうる、問題解決能力が高く、リーダーシップを発揮できる研究者・技術者を育成する。

9.航空宇宙工学演習Ⅰ-Ⅳ、航空宇宙工学設計製図Ⅰ、Ⅱ、エアロスペースエンジニアリングセミナーでは、アクティブラーニング、PBL、グループワークを取り入れた授業方法を実施する。

10.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、航空宇宙分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

11.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

12.航空宇宙工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示す。

13.卒業要件として、共通教育科目、専門基礎科目、専門科目の必要単位数を別途定める。

海洋システム工学課程

○教育目的

海洋における人間活動に関わるすべての技術は、人間および環境との調和の上にあるべきとの基本理念のもとに、海洋における各種の人工システムに関する研究、開発、設計、生産、運用を担う人材、および海洋環境の計測、保全、創造に寄与できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.数学、物理学、及び情報科学に関する知識とそれらを工学に応用できる。
- 2.海洋システム工学の専門知識と技術を体系的に学び、応用できる。
- 3.日本語で、海洋システム工学の文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、多面的に物事を考える能力とその素養を身につけている。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と自己表現能力を身につけている。
- 6.海洋システム工学について、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動能力を身につけている。
- 7.海洋システム工学を利用して、社会の要求を解決するための創造能力（デザイン能力）を身につけている。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に海洋システム工学について、その応用を含む学問分野全般を学習できる能力を身につけている。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめる能力を身につけている。
- 10.海に対する愛情を育み、地球システムの中の海洋システムにおける人間活動の在り方について考え、海洋に関わる技術者としての自覚をもっている。

11.自ら問題を設定して解決できる自立した技術者としての基礎能力を養い、海洋に関わる自然および人工システムに関する基礎知識を習得している。

12.海洋に関わるさまざまな問題を分析し、その本質を知る解析力と調和のとれた解を導くための統合化力を身につけている。

13.上記の解析力と統合化力を駆使して、海洋に関連する新しいシステムを創造する能力を身につけている。

○ディプロマ・ポリシー

海洋システム工学課程は、海洋における人間活動に関わるすべての技術は、人間および環境との調和の上にあるべきとの基本理念のもとに、海洋における各種の人工システムに関する研究、開発、設計、生産、運用を担う人材、および海洋環境の計測、保全、創造に寄与できる人材を育成することを目的とする。

このような目的に従い、以下の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

1.数学、物理学及び情報科学に関する知識を工学に応用できる。

2.海洋システム工学の専門知識と技術を体系的に工学に応用できる。

3.日本語等で、海洋システム工学に関連する文章を、読み、書くことができ、論理的に議論することができる。

4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、豊かな教養に基づき、多面的に物事を考えることができる。

5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と自己表現能力を身に付けている。

6.海洋システム工学の専門領域において、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観を身に付け、それに基づく判断・行動ができる。

7.海洋システム工学に関する専門知識と技術を利用することにより、社会の様々な問題を解決する創造能力を身に付けている。

8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に海洋システムの専門分野についての技術を学習していくことができる。

- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。
- 10.海に対する愛情を育み、地球システムの中の海洋システムにおける人間活動の在り方について考え、海洋に関わる技術者としての自覚を身に付けている。
- 11.自ら問題を設定して解決できる自立した技術者としての基礎能力を養い、海洋に関わる自然および人工システムに関する基礎知識を習得している。
- 12.海洋に関わるさまざまな問題を分析し、その本質を知る解析力と調和のとれた解を導くための統合化力を身に付けている。
- 13.上記の解析力と統合化力を駆使して、海洋に関連する新しいシステムを創造する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.「機械系学類および海洋システム工学課程の教育目標」の達成を目的として、学位授与に必要とされる能力（ディプロマ・ポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程の編成を行う。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。
- 3.学生の機械系学類内の課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。
- 4.教養豊かな人間性を涵養し、幅広い学修成果を身に付けるために、共通教育科目を配置する。工学を学ぶために必要な自然科学全般についての基盤的知識を修得し、生涯に亘る学びの基礎を築くために、専門基礎科目を配置する。さらに、専門科目の中でも、特に機械系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。
- 5.1年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けるため、共通教育科目を中心に配置する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配置する。また、1年次に「機械及び航空宇宙海洋工学概論Ⅰ、Ⅱ（必修）」を配置し、機械系学系の最先端研究を紹介して各課程の特色を理解させるとともに、機械系学

類の基礎力学科目の入門を講義し、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

6.2年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と本課程の基礎的な専門科目を中心に配置する。また海洋システム工学課程で学ぶ学問分野全般を俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する高度な専門科目への接続を円滑にするため、2年次には入門的な課程専門科目の講義を適切に配置するとともに、統合化力を養うためのPBLプログラム科目（海洋システムプロジェクト演習）を配置する。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配置し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3年次以降では、課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習を通して、海洋システム工学分野に関する高度な知識を身に付け、問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4年次には卒業研究（6単位）を必修とし、海洋システム工学分野における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。なお、卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.海洋システム工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で明示する。"

機械工学課程

○教育目的

機械工学全般にわたる幅広い基礎学理・基礎知識を十分身に付け、機械システム、エネルギーシステムの高度機能化・知能化・高信頼性に対応した専門知識を修得するような教育を行います。また、これらの学理・知識を基礎として、国際的な視野と感覚をもち、人間としての倫理観を備え、人・環境と共存・共生できる機械技術、機械システムの発展を目指して、学際的な領域を含む幅広い分野で活躍できる個性と創造性の豊かな機械技術者を育成します。

○教育目標

- 1.数学、物理学、及び情報科学に関する知識とそれらを工学に応用できる。
- 2.機械工学の専門知識と技術を体系的に学び、応用できる。
- 3.日本語で、機械工学の文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、多面的に物事を考える能力とその素養を持つ。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と自己表現能力を持つ。
- 6.機械工学について、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動能力を持つ。
- 7.機械工学を利用して、社会の要求を解決するための創造能力（デザイン能力）を持つ。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に機械工学について、その応用を含む学問分野全般を学習できる。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめる能力を持つ。
- 10.機械工学の高度な専門知識を持つ。
- 11.機械工学の基礎知識、専門知識を利用して計画的、創造的に問題を解決し、成果として

まとめるための能力を持つ。

○ディプロマ・ポリシー

機械工学課程は、本課程のカリキュラムに沿って、教育目標にかかげる以下の能力を身に付けたものに学士（工学）の学位を授与する。

- 1.数学、物理学及び情報科学に関する知識とそれらを工学に応用できる。
- 2.機械工学の専門知識と技術を体系的に工学に応用できる。
- 3.日本語等で、機械工学に関連する文章を、読み、書くことができ、論理的な議論ができる。
- 4.グローバル化し、高度にネットワーク化された情報化社会に柔軟に対応できるように、豊かな教養に基づき、多面的に物事を考えられる。
- 5.国際的コミュニケーション能力を高め、異文化との交流を行う対話能力と自己表現能力を身に付けている。
- 6.機械工学の専門領域において、社会および自然に及ぼす影響や効果、およびこれらの分野の専門家、技術者が社会に対して負っている責任を理解し、具体例を通して倫理観とそれに基づく判断・行動ができる。
- 7.機械工学の専門分野を利用して、社会の要求を解決するための創造能力（デザイン能力）を身に付けている。
- 8.生涯学習の観点から、自主的、継続的に機械系学類の専門分野について、その応用を含む学問分野全般を学習できる。
- 9.与えられた制約のもとで計画的に仕事を進め、まとめることができる。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.機械工学課程の教育目標の達成を目的として、教育課程の編成を行う。
- 2.工学の基礎に根ざした学問の系統性と順次性を尊重して、共通教育科目、専門基礎科目及び専門科目（学域共通科目、学類基盤科目、課程専門科目）により構成される整合性・一貫性を持つ体系化された教育課程を編成する。

3.学生の機械工学課程への所属は経過選択型とし、柔軟で自由度の高い進路選択を可能にする。

4.共通教育科目の履修により、教養豊かな人間性と幅広い学修成果を身に付けさせる。専門基礎科目の履修により、工学を学ぶために必要な、自然科学全般についての基盤的知識を修得させるとともに、生涯に亘る学びの基礎を築く。専門科目の中でも、特に機械系学類全体で必要とされる科目を学類基盤科目に指定する。

5.1 年次では、学生の幅広い学修を保証し、豊かな教養を身に付けさせるため、共通教育科目を中心に配当する。同時に、4年間の学士課程教育の基礎を構築するため、専門基礎科目を適切に配当する。また、1年次に「機械及び航空宇宙海洋工学概論Ⅰ、Ⅱ（必修）」を配当し、機械系学系の最先端研究を紹介して各課程の特色を理解させるとともに、機械系学類の基礎力学科目の入門を講義し、2年次以降の所属課程を考える機会を提供する。

6.2 年次では、初年次の共通教育科目と専門基礎科目を中心とする教育で得られた基礎的で幅広い学修成果を、3年次以降の専門科目履修に繋げることを目的として、専門基礎科目と各課程の基礎的な専門科目を中心に配当する。また講義・実習を通して、機械工学課程で学ぶ学問分野全般を俯瞰する視点を獲得し、3年次以降に学習する専門科目への接続を円滑にするため、2年次には学類基盤科目と入門的な課程専門科目を適切に配当する。さらに、2年次から3年次にかけて、「工学倫理（必修）」、「環境倫理（必修）」を配当し、技術者・研究者としての倫理観を涵養する。

7.3 年次以降では、機械工学課程専門科目を中心に配当し、講義・実験・実習・演習などを通して、機械工学課程に関する問題解決に応用できる能力を育成する。

8.4 年次には卒業研究（6単位）を必修とし、機械工学課程における最先端の研究テーマを設定して学生の研究意欲を高め、系統的な研究指導により基礎的な研究能力を育成する。卒業研究履修には履修資格を設ける。

9.成績評価の基準・方法は工学域カリキュラム・ポリシーに記載のとおりとする。

10.機械工学課程の求める人材、教育目標、教育制度・教育方法、卒業要件、卒業後の進路を受験生や在学生にわかりやすい形で示す。

生命環境科学域

○教育目的

生物の機能と生命現象の解明、自然環境、自然現象の理解と、それらの調和と持続的な利用のための基礎から応用までの広範な科学的知識と技術を修得するとともに、豊かな教養と問題解決能力、高い倫理観と創造力を身につけ、社会の多方面で貢献できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.地球市民としての高い教養とグローバルな視点から物事を考える素養を養います。
- 2.生命環境科学とその関連領域である自然科学分野に関する科学技術が社会に及ぼす影響の大きさを認識させ、科学技術に携わる者の責任感と倫理観を養います。
- 3.専門教育の基盤となる数学、物理学、化学、生物学、地学および情報技術などに関する基礎知識を習得させ、それらを応用できる能力を育成するとともに、論理的思考力を養います。
- 4.生命環境科学とその関連領域である自然科学分野の学術的専門知識と技術を修得し、それらの専門知識を問題解決に応用できる能力を育成し、生命環境科学域に関わる研究者ならびに専門技術者としての素養を養います。
- 5.社会における多様な問題に対して、生命環境科学とその関連分野である自然科学分野の専門知識と技術を利用し、総合的に判断して、解決するためのデザイン能力を養います。
- 6.国際的な視野で情報を収集できるとともに、論理的な記述力、プレゼンテーション能力、および、国内ならびに国際的に通用するコミュニケーション能力を身につけさせます。
- 7.意欲を持って自主的に学修に取り組む力を涵養し、社会に出てからも生涯にわたって自ら進んで継続的に学修できる能力を養います。
- 8.生命環境科学分野とその関連領域である自然科学分野に関する広範な問題に取り組ませることで、計画力およびまとめる能力を養い、応用力および創造力を育成します。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

獣医学、応用生命科学、緑地環境科学、ならびにこれらの基盤となる自然科学分野に関する教育研究を行い、教育目標に示す能力を修得したものに学位を授与する。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、次の教育課程を提供する。

- 1.高い教養を備え、科学技術に携わる者の責任感と倫理観を身に付け、国際社会で活躍する能力を養うために、共通教育科目として導入科目、教養科目、基盤科目を設ける。
- 2.基礎科学の知識を広く修得し、それらを応用する基盤となる能力を養うために、専門基礎科目（理系基礎科目）を配置する。
- 3.各学術領域の専門知識と技術、ならびに問題解決能力とコミュニケーション能力を養うために、各学類・課程の専門科目として講義、演習、実験・実習科目を体系的に配置する。

成績評価の基準については、以下の通りとする。

- 1.成績評価は、ディプロマ・ポリシーを踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた基準に沿って、A+からDの評語で評価する。特に、単位修得（C以上）の基準を到達度として明記する。
- 2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善を図る。
- 3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善を図る。

成績評価の方法については、以下の通りとする。

- 1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組み合わせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業へ

の出欠状況は成績評価には使わない。

2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。

アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

食料やエネルギーなどの多様な資源を利用し、人間生活に必要な有用物質を生産し活用するためには、また、人間が良好な環境で生活できる社会を持続的に発展させるためには、環境と調和した社会活動に貢献できる人材が求められています。生命環境科学域は、生物の多様な生命現象や生命機能の解明とその利用をめざしたバイオサイエンス・バイオテクノロジー、持続可能な生命環境の保全と創成、それらの基盤となり、さらに広範な自然現象の理解と応用をめざす自然科学についての専門的知識や技術とともに、豊かな教養と問題解決能力、高い倫理観と創造力を身につけ、産業・社会の発展と学術の進歩に貢献できる人材の育成をめざしています。

したがって、生命環境科学域は次のような学生を求めています。

- 1.生命現象・機能とその環境についての科学と自然科学を学ぶことに対する明確な目的意識をもち、社会の持続的発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.幅広い興味をもち、自ら進んで学ぶ探究心をもっている人

上記のアドミッション・ポリシーにしたがい、次の1～3の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.大学入学共通テストで課している科目の内容を十分に身につけていること
- 2.物理、化学、生物だけでなく、データ解析などに必要な数学の基礎学力を身につけていること
- 3.学術雑誌の内容の理解、レポート作成、研究内容の発表のための英語や国語の基礎学力を身につけていること

獣医学類

○教育目的

動物の医療を根幹とする総合的な学問である獣医学の高度な教育研究を通じて、動物に対する先端医療のみならず、ヒトと動物の共生に係わる諸問題に適宜適切に対応するための動物科学の基礎と応用各分野における幅広い知識と技術を教授するとともに、優れた学識と生命倫理を尊重し、動物愛護を行動規範とする高い倫理観を備え、応用力と実践力に富む獣医師等の人材を育成する。

○教育目標

- 1.自然科学一般、さらには人文・社会科学に至る教養を幅広く修得し、高い倫理観を持ち、グローバルな視点から物事を考えることのできる素養と能力を身に付ける。
- 2.専門科目の基礎となる自然科学に関する十分な知識と言語や情報処理に関するスキルを修得するとともに、国際的に通用するコミュニケーション能力を養う。
- 3.動物の生体諸機能を維持するための細胞、組織から器官形成に至る知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 4.動物細胞を構成する様々な要素の性状・役割とその統合に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 5.食品・環境に由来する外的因子の生体への影響に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 6.病原体の特性と感染症成立についての理解およびその予防に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 7.動物の病態の成因・修復機序および疾病診断に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 8.動物における種々の疾病の診断・治療・予防に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を養う。
- 9.獣医学分野の広範な問題に取り組み、問題解決のための調査・研究の手技・手法を修得するとともに、ドキュメンテーションやプレゼンテーションの能力を培う。

10.獣医師の社会的使命と責務を理解し、その責務を果たすべく適切に行動する能力を養う。"

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

獣医学類は、本学類の教育目的・教育目標に基づき、次の能力を身に付けたものに学士（獣医学）の学位を授与する。

- 1.自然科学一般、さらには人文・社会科学に至る教養を幅広く修得し、高い倫理観を持ち、グローバルな視点から物事を考えることのできる能力を身に付けている。
- 2.専門科目の基礎となる自然科学に関する十分な知識と言語や情報処理に関するスキルを有し、国際的に通用するコミュニケーション能力を身に付けている。
- 3.細胞、組織から器官形成に至る構造・機能に関する知識を有し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 4.動物細胞を構成する様々な要素の性状・役割と、それらが統合して機能を発揮する仕組みを理解し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 5.食品・環境に由来する外的因子や、薬物の生体への影響に関する知識を有し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 6.病原体の特性と感染症成立について理解しており、感染症の予防に関する知識を有するとともに、関連する問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 7.動物の病態の成因・修復機序に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 8.動物における種々の疾病の診断・治療・予防に関する知識を修得し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 9.獣医学分野の広範な問題を解決するための調査・研究の手技・手法を身に付けており、ドキュメンテーションやプレゼンテーションによりこれを公表する能力を身に付けている。
- 10.獣医師の社会的使命と責務を理解し、その責務を果たすべく適切に行動する能力を身に付けている。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、次の教育課程を提供する。

1.論理的思考力や文章による表現力など大学での学びの基礎となる力を養うために導入科目（初年次ゼミナール）を配置する。

2.幅広い教養、多面的な視野、外国語によるコミュニケーション能力を養うために、教養科目および基盤科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）を配置する。

3.獣医学の学修に必要とされる専門基礎科目群を配置し、特に重要な化学、生物学の講義・実習を必修科目とする。

4.専門科目として以下の講義及び実習を配置する。

- (1) 獣医師の社会的使命や、獣医学に関連する法令等の理解に必要となる科目
- (2) 健康な動物の形態や機能など、獣医学を包含する生命科学の基礎知識を修得するための講義と実習
- (3) 動物の様々な病態とその発症メカニズムを、集団・個体・組織・細胞・分子の各レベルにおいて深く理解するための講義と実習
- (4) 新興感染症や人獣共通感染症、食料の安定供給や安全性確保など、社会から要請される様々な課題に対応する能力を身に付けるための講義と実習
- (5) 動物の疾患の予防、診断、治療の方法に関する、最先端の知識と技術を取り入れた講義と実習（少人数の実習を含む）
- (6) 生命科学全般に対する問題解決能力、論理的思考能力、ドキュメンテーションおよびプレゼンテーション能力、外国語論文読解能力の育成のための卒業研究および獣医学演習
- (7) 創薬や産業動物、公衆衛生関連など社会的要請の高い分野への獣医師の輩出を目的とした、職域に即した少人数による学外実習を含む選択科目群
- (8) 国際的に活躍できる高度専門技術者の養成を目的とした、国内外の様々な機関への幅広い学外実習（少人数によるインターンシップ）

5.食生産科学副専攻科目として、農産物と畜産物の生産現場から流通や消費までの一連のプロセスを理解し、食の安全や安心の確保に貢献できる素養を備えた人材を育成するための科目を配置する。

成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

獣医学類は、動物に対する先端医療、人間と動物の共生に係わるさまざまな課題に関する専門的知識や技術とともに、豊かな教養と問題解決能力、高い生命倫理観と創造力を身につけ、産業・社会の発展と学術の進歩に貢献できる獣医師・技術者・研究者を育成します。

したがって、獣医学類では次のような学生を求めています。

- 1.動物に対する先端医療、人間と動物の共生について学ぶことに対する明確な目的意識をもち、社会の持続的発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.幅広い興味をもち、自ら進んで学ぶ探求心をもっている人

以上に基つき、次の1～3の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.大学入学共通テストで課している科目の内容を広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.物理、化学、生物だけでなく、実験結果の解析などに必要な数学の基礎学力を身につけていること
- 3.学術雑誌の内容の理解、レポート作成、研究内容の発表のための英語や国語の基礎学力を身につけていること

一般選抜（前期日程）

大学入学共通テストで課している科目の内容を広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力を有していることを、個別学力検査の理科、数学によって評価します。英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの国語、個別学力検査の英語によって評価します。

一般選抜（後期日程）

大学入学共通テストで課している科目の内容を広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力および英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの数学、国語、個別学力検査の総合科目によって評価します。

帰国生徒特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。英語や国語の基礎学力を有していることを、TOEFL の成績、小論文、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力を有していることを、日本留学試験の数学、理科によって評価します。英語や国語の基礎学力を有していることを、TOEFL の成績、小論文、口頭試問・面接によって評価します。"

応用生命科学類

○教育目的

生命現象を分子から生態系に至る幅広い観点で理解し、バイオサイエンスとバイオテクノロジーの基礎から応用にわたる広範な知識に基づいて、応用生命科学領域における多様な問題を解決するための応用力と実践力を兼ね備えた人材を育成する。

○教育目標

1. 応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に到るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を養う。
2. バイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を習得し、生命現象を分子、細胞レベルから個体、生態系に至る幅広い観点で理解する能力を身に付ける。
3. 生物資源や生命機能を生活や産業さらには環境保全や修復に応用する技術開発などの生命科学の応用分野に関する高度な専門知識を身に付ける。
4. 食料生産、農産物・食品の加工・貯蔵から流通さらには食品衛生に至る幅広い知識を習得し、食料生産や食品産業さらには食の安全に関わる技術者としての素養と能力を身に付ける。
5. 実験・実習、卒業研究などを通して、実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を養う。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付ける。
6. 科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心をもち、継続して学修する能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

応用生命科学類は、本学類の教育目的・教育目標に基づき、次の能力を身に付けたものに学士（応用生命科学）の学位を授与する。

1. 応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に至るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を身に付けている。

2. バイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を修得し、生命現象を分子、細胞レベルから個体、生態系に至る幅広い観点で理解する能力を身に付けている。
3. 生物資源や生命機能を生活や産業さらには環境保全や修復に応用する技術開発などの生命科学の応用分野に関する高度な専門知識を身に付けている。
4. 食料生産、農産物・食品の加工・貯蔵から流通さらには食品衛生に至る幅広い知識を修得し、食料生産や食品産業さらには食の安全に関わる技術者としての素養と能力を身に付けている。
5. 実験・実習、卒業研究などを通して、実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を身に付けている。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付けている。
6. 科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心を持ち、継続して学修する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、次の教育課程を提供する。

1. 論理的思考力や文章による表現力など大学での学びの基礎となる力を養うために、導入科目（初年次ゼミナール）を配置する。
2. 幅広い教養、多面的な視野、外国語によるコミュニケーション能力を養うために、教養科目および基盤科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）を配置する。
3. 応用生命科学類の両課程で必要となる基礎的な知識を修得させるため、専門基礎科目（理系基礎科目）を配置する。
4. 応用生命科学類におけるより専門的な領域への興味を深めさせるとともに、他の学類における学問との関連性を理解させるために、学域共通科目（生命環境科学概論）を配置する。
5. 生命機能化学課程および植物バイオサイエンス課程での学修を進める上で必要な基本的専門知識を身に付けさせるために、学類基礎科目および学類基盤科目を配置する。

6.生命機能化学課程、植物バイオサイエンス課程のそれぞれにおける専門的知識を修得させるために、講義科目としての学類専門科目を体系的に配置する。

7.生命機能化学課程、植物バイオサイエンス課程のそれぞれにおける専門的技能、問題解決能力、コミュニケーション能力を養うために、実験・実習・演習科目としての学類専門科目を体系的に配置する。

成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

応用生命科学類は、生命機能化学課程と植物バイオサイエンス課程の2つの課程が協力して、生命現象の解明と生物資源の利用に関する幅広い教育を行います。

このような教育を通して、広範なバイオサイエンス・バイオテクノロジーに関する専門的な知識や技術を修得するとともに、豊かな教養と問題解決能力、高い倫理観や創造力を身につけた、産業・社会の発展と学術の進歩に貢献できる専門技術者・研究者の育成をめざします。

したがって、応用生命科学類では次のような学生を求めています。

- 1.バイオサイエンス・バイオテクノロジーについて学ぶための基礎的知識をもっている人
- 2.社会における複雑な課題の発見とその解決のために、自ら深くかつ論理的に思考して判断し、表現する基礎的能力をもっている人
- 3.他の専門分野とも柔軟に連携しながら、社会の持続的発展に貢献したいと考えている人

以上に基づき、次の1～5の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学び、高い学力を有すること
- 2.データ解析などに必要な数学の基礎学力を身につけていること
- 3.学術雑誌の内容の理解、レポート作成、研究内容発表のために必要な英語や国語の基礎学力と論理的な思考力を備えていること

4.その他の教科・科目について幅広い知識を有すること

5.自ら積極的に考えて表現することができ、かつ多様な分野に興味と関心をもち、課題の発見とその解決のために他者と協働して行動できること

一般選抜（前期日程）

大学で学習するための基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学んでいることを、大学入学共通テストの理科、個別学力検査の理科によって評価します。数学の基礎学力を備えていることを、大学入学共通テストの数学、個別学力検査の数学によって評価します。英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの外国語、国語、個別学力検査の英語によって評価します。また、主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度を調査書により評価します。

一般選抜（後期日程）

大学で学習するための基礎学力を有していることを、大学入学共通テストおよび調査書によって評価します。物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学んでいることを、大学入学共通テストの理科および個別学力検査の小論文によって評価します。数学の基礎学力を備えていることを、大学入学共通テストの数学によって評価します。また、英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの外国語と国語、および個別学力検査の小論文によって評価します。小論文ではさらに、柔軟で論理的な思考力・判断力・表現力ならびに主体的な問題解決能力を評価します。

学校推薦型選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、大学入学共通テストおよび調査書によって評価します。物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学んでいることを、大学入学共通テストの理科によって評価します。数学の基礎学力を備えていることを、大学入学共通テストの数学によって評価します。また、英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの外国語（英語）と国語によって評価します。さらに、志願理由書で思考力、判断力および表現力を評価します。様々な課題について他者と

協働的に取り組む姿勢と高い探求心および勉学意欲を推薦書、志願理由書および活動報告書で評価します。

帰国生徒特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、最終出身学校の成績証明書によって評価します。物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学んでいること、また国語の基礎学力を備えていることを、個別学力検査の小論文および面接によって評価します。数学の基礎学力を備えていることを、個別学力検査の数学によって評価します。また、英語の基礎学力を有していることを、TOEFLの成績で評価します。さらに、国際感覚、自己表現力、積極性、独自性、および様々な課題について他者と協働的に取り組む姿勢を個別学力検査の面接によって評価します。これらに加えて、柔軟で論理的な思考力ならびに主体的な問題解決能力を備えていることを個別学力検査の小論文で評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験と最終出身学校の成績証明書によって評価します。物理、化学、生物のうち少なくとも2科目について深く学んでいることを、日本留学試験の理科によって評価します。数学の基礎学力を備えていることを、日本留学試験の数学によって評価します。また、英語や国語の基礎学力に加えて、柔軟な思考力・判断力・表現力を備えていること、および様々な課題について他者と協働的に取り組む姿勢を、TOEFLの成績、個別学力検査の小論文、口頭試問・面接によって評価します。

生命機能化学課程

○教育目的

生命機能化学課程では、動物、植物、微生物といった枠組みにとらわれることなく、生命現象について分子レベルで理解させることに重点をおいた教育を行います。同時に、さまざまな生命体が織り成す生態系、環境についても、物質循環、分子間相互作用といった概念で捉えさせる。さらに、生物資源や生命機能を生活や産業さらには環境保全・修復などへの応用に関する教育を行い、バイオサイエンス・バイオテクノロジーに関わる広範な領域で活躍できる人材を育成します。

○教育目標

- 1.応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に到るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を養います。
- 2.生化学、有機化学、微生物学などのバイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を習得し、生命現象を分子レベルで捉えることのできる能力を身につけます。
- 3.生物が作り出す様々な資源や生物の優れた機能を生活や産業さらに環境保全等に有効に利用するための技術開発など生命機能化学の応用分野に関する高度な専門知識を身につけます。
- 4.食品化学、食品製造学、食品衛生学などの食に関する幅広い知識を習得し、食品産業や食の安全に関わる専門技術者として必要な素養と能力を身につけます。
- 5.実験・実習、卒業研究などを通して実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を養う。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身につけます。
- 6.科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心を持ち、継続して学修する能力を身につけます。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

生命機能化学課程は、本課程の教育目的・教育目標に基づき、以下の能力を身に付けたものに学士（応用生命科学）の学位を授与する。

- 1.応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に至るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を身に付けている。
- 2.生化学、有機化学、微生物学などのバイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を修得し、生命現象を分子レベルで捉えることのできる能力を身に付けている。
- 3.生物が作り出す様々な資源や生物の優れた機能を生活や産業さらに環境保全等に有効に利用するための技術開発など生命機能化学の応用分野に関する高度な専門知識を身に付けている。
- 4.食品化学、食品製造学、食品衛生学などの食に関する幅広い知識を修得し、食品産業や食の安全に関わる専門技術者として必要な素養と能力を身に付けている。
- 5.実験・実習、卒業研究などを通して、実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を身に付けている。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付けている。
- 6.科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心を持ち、継続して学修する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、以下の教育課程を提供する。

- 1.論理的思考力や文章による表現力など大学での学びの基礎となる力を養うために、導入科目（初年次ゼミナール）を配置する。
- 2.幅広い教養、多面的な視野、外国語によるコミュニケーション能力を養うために、教養科目および基盤科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）を配置する。
- 3.生命機能化学課程での学修に必要な基礎的知識を修得させるため、専門基礎科目（理系基礎科目）を配置する。

4.応用生命科学類におけるより専門的な領域への興味を深めさせるとともに、他の学類における学問との関連性を理解させるために、学域共通科目（生命環境科学概論）を配置する。

5.生命機能化学課程での学修に必要となる生化学、有機化学、微生物学等の基本的な専門知識を身に付けさせるために、学類基礎科目および学類基盤科目を配置する。

6.生命機能化学課程における専門的知識を修得させるために、講義科目としての学類専門科目を体系的に配置する。

7.生命機能化学課程における専門的技能、問題解決能力、コミュニケーション能力を養うために、少人数のグループ討議等を軸とした実験・実習・演習科目としての学類専門科目を体系的に配置する。

8.食の安全・安心に関する専門家の育成をめざし、食品安全科学分野に特化した専門技術者を養成するためのカリキュラムコースとして、「食品安全科学プログラム」を設置する。

成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

植物バイオサイエンス課程

○教育目的

植物バイオサイエンス課程では生命現象をゲノム、遺伝子、タンパク質、代謝物が形作るシステムとして理解することを主眼とした教育を行う。さらに、植物を中心とした多様な生物を対象とするバイオサイエンスを食料、飼料、医薬品、工業原料、環境修復素材等の生産と利用に応用できる能力を養い、バイオサイエンス・バイオテクノロジーに関わる広範な領域で活躍できる人材を育成する。

○教育目標

- 1.応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に到るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を養います。
- 2.細胞分子生物学や植物生理学などバイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を習得し、生命現象を細胞から生態系に至る幅広い観点で理解する能力を身につけます。
- 3.植物資源等の有効利用や環境の保全・修復などの生命科学の応用に必要な高度で専門的な知識を身につけます。
- 4.食料生産、農産物・食品の製造・加工、貯蔵、流通から食の管理に到る幅広い知識を習得し、農業、食品産業、健康産業、農産物・食の安全に関わる技術者としての素養と能力を身につけます。
- 5.実験・実習、卒業研究などを通して実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を養う。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身につけます。
- 6.科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心をもち、継続して学修する能力を身につけます。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

植物バイオサイエンス課程は、本課程の教育目的・教育目標に基づき、以下の能力を身に付けたものに学士（応用生命科学）の学位を授与する。

- 1.応用生命科学に関わる領域だけでなく、自然科学、人文・社会科学に至るまで幅広く学修し、グローバルで多面的に物事を考えられる素養と能力を身に付けている。
- 2.細胞分子生物学や植物生理学などバイオサイエンス・バイオテクノロジーの基礎となる知識を習得し、生命現象を細胞から生態系に至る幅広い観点で理解する能力を身に付けている。
- 3.植物資源等の有効利用や環境の保全・修復などの生命科学の応用に必要な高度で専門的な知識を身に付けている。
- 4.食料生産、農産物・食品の製造・加工、貯蔵、流通から食の管理に至る幅広い知識を修得し、農業、食品産業、健康産業、農産物・食の安全に関わる技術者としての素養と能力を身に付けている。
- 5.実験・実習、卒業研究などを通して、実験・研究に関する基礎的な技術とともに、自主的、継続的に学修できる能力、論理的な思考と記述力、問題解決能力を身に付けている。さらに、国際的な視野で多様な情報を収集できるとともに、海外への情報発信が可能なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付けている。
- 6.科学における高い倫理観を有し、信念をもって行動できる能力を持つとともに、卒業後も科学における高い探求心を持ち、継続して学修する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、以下の教育課程を提供する。

- 1.論理的思考力や文章による表現力など大学での学びの基礎となる力を養うために、導入科目（初年次ゼミナール）を配置する。
- 2.幅広い教養、多面的な視野、外国語によるコミュニケーション能力を養うために、教養科目および基盤科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）を配置する。
- 3.植物バイオサイエンス課程で必要となる基礎的な知識を修得させるため、専門基礎科目（理系基礎科目）を配置する。
- 4.応用生命科学類におけるより専門的な領域への興味を深めさせるとともに、他の学類における学問との関連性を理解させるために、学域共通科目（生命環境科学概論）を配置する。

る。

5.植物バイオサイエンス課程での学修に必要となる細胞分子生物学や植物生理学等の基本的な専門知識を身に付けさせるために、学類基礎科目および学類基盤科目を配置する。

6.植物バイオサイエンス課程における専門的知識を修得させるために、講義科目としての学類専門科目を体系的に配置する。

7.実験・研究に関する基礎的な技術を修得し、論理的な思考力、問題解決能力等を養うために、少人数のグループ討議等を軸とした実験・実習・演習としての学類専門科目を配置する。

8.農産物と畜産物の生産現場から流通や消費までの一連のプロセスを理解し、食の安全や安心の確保に貢献できる素養を備えた人材を育成するため、食生産科学副専攻を設置し、その履修にも対応する科目を配置する。

9.植物工場に関する科学と技術を理解し、植物工場産業を支えることのできる素養を備えた人材を育成するため、植物工場科学副専攻を設置し、その履修にも対応する科目を配置する。

成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

緑地環境科学類

○教育目的

里地・里山や都市圏の保全・創成に向けて、様々なスケールでの環境問題を総合的にとらえ、環境要素と生態系や人の暮らしとの関わりを評価する技量や緑地を含む地域環境の望ましい管理手法を習得することで、持続的な循環型社会の構築に貢献できる人材を育成する。

○教育目標

- 1.地球規模での環境問題の軽減や都市圏の持続的発展といった課題を総合的に捉え、社会的使命感と責任をもって、緑の機能を用いた環境再生や創造に貢献できる人材を養成する。
- 2.緑地環境科学の幅広い対象領域を理解するための自然科学、人文・社会科学および情報技術に関する基礎的能力および応用する能力を養成する。
- 3.自然環境・生態系などのモニタリングや保全、創造、維持管理にかかわる原理やシステムを理解し、技術開発やその実践にかかわる専門技術や問題解決能力を養成する。
- 4.緑地環境科学の実験・実習を通しての専門教育への導入、創造性の養成、課題発掘から問題解決能力を育成し、科学的プレゼンテーション能力を養成する。
- 5.緑地環境科学の専門技術者としての論理的な記述力、図面等による表現能力、国際的に通用するコミュニケーション能力を養成する。
- 6.緑地環境科学領域、さらには広領域に渡る研究やプロジェクトを自主的、計画的に推進する能力を養成する。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

緑地環境科学類は、本学類の教育目的・教育目標に基づき、次の能力を身に付けたものに学士（緑地環境科学）の学位を授与する。

- 1.地球規模での環境問題の軽減や都市圏の持続的発展といった課題を総合的に捉え、社会的使命感と責任を持って、緑の機能を用いた環境再生や創造に貢献できる能力を身に付けている。

2.緑地環境科学の幅広い対象領域を理解するための自然科学、人文・社会科学および情報技術に関する基礎的能力および応用する能力を身に付けている。

3.自然環境・生態系などのモニタリングや保全、創造、維持管理にかかわる原理やシステムを理解し、技術開発やその実践にかかわる専門技術や問題解決能力を身に付けている。

4.緑地環境科学の実験・実習を通しての専門教育への導入、創造性の涵養、課題発掘から問題解決能力を育成し、科学的プレゼンテーション能力を身に付けている。

5.緑地環境科学の専門技術者としての論理的な記述力、図面等による表現能力、国際的に通用するコミュニケーション能力を身に付けている。

6.緑地環境科学領域、さらには広領域に亘る研究やプロジェクトを自主的、計画的に推進する能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を修得させるため、次の教育課程を提供する。

1.論理的思考力や文章による表現力など大学での学びの基礎となる力を養うために、導入科目（初年次ゼミナール）を配置する。

2.緑地環境科学の幅広い対象領域を理解するために、自然科学、人文・社会科学、情報技術に関する教養科目、基盤教育科目（外国語、情報基礎、健康・スポーツ科学科目）および学域共通科目を配置する。

3.緑地環境科学の学修に必要となる基礎的知識を修得させるために、専門基礎科目を配置する。

4.緑地環境科学の専門領域に関わる基礎的知識を修得させるために、学類基礎科目を配置する。

5.緑地環境科学の専門領域に関わる原理やシステムの理解力とその応用力を身に付けさせるために、学類専門科目を体系的に配置する。

6.専門技術者としての技能、プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力を育成するために、実験・実習科目および学外実習（インターンシップ）科目を配置する。

7.研究やプロジェクトを自主的、計画的に遂行するとともに成果をとりまとめる能力を養成するために、少人数の演習科目を配置し、卒業研究を必修とする。

8.植物工場に関する科学と技術を理解し、植物工場産業を支えることのできる素養を備えた人材を育成するため、植物工場科学副専攻の履修対象科目を配置する。

成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

緑地環境科学類は、持続可能な生命環境の保全と創成についての専門的知識や技術とともに、豊かな教養と問題解決能力、高い倫理観と創造力を身につけ、産業・社会の発展と学術の進歩に貢献できる技術者・研究者の育成をめざしています。

したがって、緑地環境科学類では次のような学生を求めています。

- 1.持続可能な生命環境の保全と創成について学ぶことに対する明確な目的意識をもち、社会の持続的発展に貢献する意欲をもっている人
- 2.幅広い興味をもち、自ら進んで学ぶ探求心をもっている人

以上にに基づき、次の1～4の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.大学入学共通テストで課している科目の内容を、十分に身につけていること
- 2.物理、化学、生物だけでなく、データ解析などに必要な数学の基礎学力と、論理的な思考力・判断力を身につけていること
- 3.学術雑誌の内容の理解、レポート作成、研究内容の発表のための英語や国語の基礎学力と表現力を身につけていること
- 4.自ら進んで学ぶための主体性を有し、かつ学内外の社会的な活動に参加しうる多様性・協働性を備えていること

一般選抜（前期日程）

大学入学共通テストで課している科目の内容を十分に身につけていることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎

学力と、論理的な思考力・判断力を有していることを、個別学力検査の理科、数学によって評価します。英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの国語、個別学力検査の英語によって評価します。学習のための主体性、社会活動のための多様性・協働性を調査書によって評価します。

一般選抜（後期日程）

大学入学共通テストで課している科目の内容を十分に身につけていることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力と、論理的な思考力・判断力、および英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの国語、理科、数学、外国語によって評価します。学習のための主体性、社会活動のための多様性・協働性を調査書によって評価します。

学校推薦型選抜

大学入学共通テストで課している科目の内容を十分に身につけていることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力と、論理的な思考力、および英語や国語の基礎学力を有していることを、大学入学共通テストの理科、数学、外国語（英語）、国語によって評価します。学習のための主体性、社会活動のための多様性・協働性を有していることを調査書、推薦書、活動報告書、小論文、面接によって評価します。

帰国生徒特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力と、論理的な思考力・判断力を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。英語や国語の基礎学力と、思考力・表現力・判断力を有していること、および学習のための主体性、社会活動のための多様性・協働性を有していることを、小論文、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、物理、化学、生物だけでなく、数学の基礎学力と、論理的な思考力を有していることを、日本留学試験の数学、理科によって評価します。英語や国語の基礎学力と、思考力・表現力・判断力を有していること、および学習のための主体性、社会活動のための多様性・協働性を有していることを、TOEFL の成績、小論文、口頭試問・面接によって評価します。

理学類

○教育目的

理学についての専門的知識の修得を通じて社会に貢献できる学生を育てる。自然現象を支配する法則を解明することが科学の本質であり、物質や事象の根源的理解こそが優れた応用につながることを理解させ、主体的な探究心に基づく洞察力と問題解決能力、応用力と実践力を兼ね備えた人材を育成する。

○教育目標

- 1.数理科学、そして物理科学、分子科学、生物科学などの自然科学から、人文・社会科学に至るまでの幅広い学問を学習することで、豊かな教養を修得し、グローバルな視点から物事を考える高い素養と能力を身に付ける。
- 2.科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、科学者が負っている社会的責任について理解する。
- 3.理学を学ぶ上で必要となる数学、自然科学の各分野、および情報技術などの基礎的知識を修得し、論理的思考力を身に付ける。
- 4.理学を学ぶ上で必要な情報を収集し、量的・質的に分析および解析し、適切に判断できる能力を修得する。
- 5.理学各領域の専門的知識を修得し、様々な専門分野における問題を解決する能力、および、発展させる能力を身に付ける。
- 6.論理的な記述力、および口頭発表、討論の能力を身につけ、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。
- 7.理学の専門知識と技術を利用して、さまざまな制約条件の下での適切な解決法を見出し、主体的かつ計画的に実施する研究遂行能力を身に付け、それらを応用する力および創造する力を修得している。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

理学類は、主体的な探究心を育み、理学各分野の専門知識を修得させるとともに、豊かな

教養と創造力を有し、社会の変化に柔軟に対応できる人材の育成をめざす。この教育目的に照らして、次のような能力を身に付けたものに学位を授与する。

- 1.数理科学、そして物理科学、分子科学、生物科学などの自然科学から、人文・社会科学に至るまで幅広く豊かな教養を修得し、グローバルな視点から物事を考える高い素養と能力を身に付けている。
- 2.科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、科学者が負っている社会的責任について理解できる。
- 3.理学を学ぶ上で必要となる数学、自然科学の各分野、および情報技術などの基礎的知識を修得し、論理的思考力を身に付けている。
- 4.理学を学ぶ上で必要な情報を収集し、量的・質的に分析および解析し、適切に判断できる能力を備えている。
- 5.理学各領域の専門的知識を修得し、様々な専門分野における問題解決能力、および発展させる能力を身に付けている。
- 6.論理的な記述力、および口頭発表、討論の能力を身につけ、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を備えている。
- 7.理学の専門知識と技術を利用して、さまざまな制約条件の下での適切な解決法を見出し、主体的かつ計画的に実施する研究遂行能力を身につけ、それらを応用する力および創造する力を修得している。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

- 1.学域4年間で一応の完結性をもたせつつ大学院までを視野に入れた、基礎的内容から専門的内容へと段階的に進行する一貫した教育課程を編成する。
- 2.主体的、かつ計画的に学ぶ能力を身につけるための前段として、1年次に少人数の初年次ゼミナールを開講する。
- 3.論理的思考力を身につけるため、数学、自然科学の各分野については、自らの専門領域にとらわれず、基礎科学から応用科学までの幅広い講義、演習および実験科目を1年次から置く。
- 4.国際的に通用するコミュニケーション基礎能力養成のため、英語科目12単位を必修とす

る他、英語以外の言語を学ぶ機会を与える。

5.幅広く豊かな教養を身に付けるために、人文社会科学系科目を含む教養科目、健康・スポーツ科学科目、情報基礎科目を置く。

6.科学者の社会的責任について考える機会のひとつとして、学域共通専門科目「生命環境科学概論」を置く。

7.国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を養うために、学類共通専門科目「科学英語」を用意する。

8.社会における関連領域の見聞を広めるキャリア教育の一環として、学外実習（インターンシップ）科目を置く。

9.各学術領域における知識と技術を身に付け、専門分野における問題解決能力、および発展させる能力を養うために、それぞれの課程で必要な専門科目の講義、演習、実験科目を配置する。

10.理学を学ぶ上で必要な情報を収集し、それらを量的・質的に分析および解析し、適切に判断できる能力を養うために、知識の修得に合わせて段階的に各学年・学期に演習科目、実験科目を置く。

11.理学類における最先端の研究テーマを設定して、基礎的な研究遂行能力や成果をとりまとめる能力、論理的な記述力、口頭発表・討論の能力を育成するために、卒業研究、演習科目を置く。

12.多様な学問領域についての学習機会を担保し、自らが学ぶ姿勢を養うために、自由選択科目を置く。

13.成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

理科学、物理科学、分子科学、生物科学とその関連領域における研究者や技術者をめざすためには、柔軟な発想と論理的思考にもとづく課題発見能力と問題解決能力が必要です。

したがって、理学類では次のような学生を求めています。

- 1.自然現象に対する強い関心と理解があり、勉学意欲に溢れる人
- 2.論理的な思考力、自ら学ぶ探究心および問題解決に向けての実行力を備えている人
- 3.国際的視野をもちつつ、地域社会への貢献をめざそうとする人
- 4.コミュニケーション能力を身につける努力を惜しまない人
- 5.健全な倫理観に基づく判断力を備えている人

以上に基づき、理学類の教育理念・目的にふさわしい学生を受け入れるため、次の1～5の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を幅広く学修し、十分な基礎学力を有していること
- 2.英文を読んで理解し、英文で自己表現するための基礎的な能力を身につけていること
- 3.自然科学を学ぶために必要な数学を履修し、基礎的な問題を解く能力を身につけていること
- 4.数学と少なくとも理科2科目について深く学び、内容を十分に理解していること
- 5.数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、さらに深く学ぶ意欲をもち、必要な努力を惜しまないこと

〈一般選抜（前期日程）〉

高等学校における教科・科目を幅広く学修し、十分な基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現する能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。また、数学の基礎的な問題を解く能力を有していることを、大学入学共通テストの数学によって評価します。さらに、数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、深く学んでいることを、個別学力検査の数学、理科で評価します。英語の基礎的な能力を備えていることを、提出書類によって評価します。

〈一般選抜（後期日程）〉

高等学校における教科・科目を幅広く学修し、十分な基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現する能力を有していることを、大学入学共通テストの外国語、個別学力検査の英語によって評価します。また、数学の基礎的な問題を解く能力を有していることを、大学入学共通テストの数学によって評価します。さらに、数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、深く学んでいることを、大学入学共通テストの数学、理科、個別学力検査の数学または理科または外国語（英語で化学を含む内容）で評価します。英語の基礎的な能力を備えていることを、提出書類によって評価します。

〈学校推薦型選抜〉

高等学校における教科・科目を幅広く学修し、十分な基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現する能力を有していることを、大学入学共通テストの外国語（英語）によって評価します。また、数学の基礎的な問題を解く能力を有していることを、大学入学共通テストの数学によって評価します。さらに、数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、深く学んでいることを、大学入学共通テストの数学、理科で評価します。英語の基礎的な能力を備えていることを、提出書類によって評価します。さらに、調査書、推薦書、活動報告書、志願理由書、および面接によって、主体性・多様性・協働性、および思考力・判断力・表現力を評価します。

〈帰国生徒特別選抜〉

大学で学習するための基礎学力を有していることを、面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現する能力を有していることを、TOEFLの成績によって評価します。また、数学の基礎的な問題を解く能力を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。さらに、数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、深く学んでいることを、個別学力検査の数学、理科で評価します。

〈外国人留学生特別選抜〉

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、口頭試問・面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現する能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。また、数学の基礎的な問題を解く能力を有していることを、日本留学試験の数学、個別学力検査の数学によって評価します。さらに、数学、物理、化学、生物のいずれかが得意で、深く学んでいることを、日本留学試験の数学、理科、個別学力検査の数学によって評価します。

数理科学課程

○教育目的

数理科学とは数学とその応用を学ぶ学問である。長い歴史を経て成熟した数学は、それ自体が豊穡な世界を形成しているばかりでなく、諸分野との連携によって現代的な問題意識に対応する数理科学として発展している。数理科学課程は、このような学問を継承し発展させるための教育・研究を行う。数理科学への深い理解に根ざす洞察力、論理的思考力、検証能力を涵養し、同時に広い視野に基づくプレゼンテーション・コミュニケーション能力を向上させる。これらの教育を通して、数理科学の発展に寄与するとともに社会に貢献できる人材の育成をめざす。

○教育目標

- 1.数理科学を学ぶ上で基礎となる線形代数学と微積分学を講義・演習などを通して深く理解する。
 - 2.代数学、幾何学、解析学、確率統計学、応用数学など数理科学諸分野を偏りなく学び、多角的な視点から数理科学の発展に寄与できる能力を養う。
 - 3.情報処理など隣接諸分野の基礎知識を修得し、現実社会の問題解決に応用できる素養を身に付ける。
 - 4.英語のテキストや論文を読む能力を身に付けるとともに、グローバル社会におけるコミュニケーションツールとしての英語の能力を養う。
 - 5.幅広い学問を学修し、広い視野に立って物事を俯瞰する能力を養う。
- 演習を通じて、情報収集と状況理解の訓練を重ね、自ら判断して問題を解決する能力を養う。
- 6.卒業研究等を通して、より高度な論理的思考力を養成し、プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を養う。

○ディプロマ・ポリシー

次の資質・能力を身に付けたものに対して卒業を認定し、学位を授与する。

- 1.数理科学の基礎である線形代数学と微積分学を深く理解している。
- 2.多角的な視点から数理科学の発展に寄与できる能力を身に付けている。
- 3.現実社会の問題解決に応用できる素養を身に付けている。
- 4.英語のテキストや論文を読む能力を身に付けるとともに、グローバル社会におけるコミュニケーションツールとしての英語の能力を備えている。
- 5.幅広い学問を学修し、広い視野に立って物事を俯瞰する能力を身に付けている。
- 6.自ら判断して問題を解決する能力を身に付けている。
- 7.より高度な論理的思考力を養成し、プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を備えている。

○カリキュラム・ポリシー

- 1.1 年次には、数学、物理学、化学、生物学の専門基礎科目を配置するとともに、線形代数学と微積分学をより深く理解するために演習科目を置く。
- 2.低学年次においては、幅広い学問の学修と人格形成のために、外国語科目、教養科目を配置する。
- 3.現実社会の問題解決に応用できる素養を身に付けるために、情報処理など隣接諸分野の基礎科目も配置する。
- 4.2 年次においては、代数学、幾何学、解析学、確率統計学における基礎的な講義演習科目を配置する。3 年次においては、2 年次の学修を統合的に理解し発展させるための科目を配置する。多角的な視点から数理科学の発展に寄与できる能力を修得するために、代数学、幾何学、解析学、確率統計学に加え応用数学の科目を配置する。
- 5.通常の授業でも英語のテキストや論文を読む機会を設け、コミュニケーションツールとしての英語の能力を身に付けるために、科学分野の英語を専門的に学ぶ科目を配置する。
- 6.4 年次においては、より高度な論理的思考力、プレゼンテーション・コミュニケーション能力を養い、問題の発見と解決のスキルを修得するために、卒業研究と演習科目を配置する。
- 7.成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

物理科学課程

○教育目的

物理科学課程では、自然現象を理解する上で必要となる物理学から地球科学、宇宙科学までの幅広いスケールでの教育・研究を通じて、自然科学および科学技術に対する広い視野とともに論理的な思考能力や創造力、コミュニケーション能力を養うことを目的として教育を行います。地球環境・エネルギー資源など 21 世紀の様々な課題にも積極的に取り組み、科学の発展に寄与するとともに社会に貢献する人材の育成を目指します。

○教育目標

物理科学課程では上記理念・目的を実現するために、具体的な教育目標を次のように設定します。

- 1.物理学、化学、生物学、地学などの自然科学、数学、情報科学、さらには人文・社会科学に至るまでの幅広い科目を学習させ、グローバルな視点から物事を考える高い素養と能力を身につかせます。
- 2.現代物理学を学ぶ上で必要となる基礎的知識を習得させ、実験、演習を行うことにより、自然現象をどのように理解すればよいか、その論理的思考力を養います。
- 3.より専門的な科目の履修を通して、物理科学を基礎とした様々な専門分野への応用、発展させる能力を養います。
- 4.自由な課題の実験・演習を通して、自らテーマの設定を行うことにより創造力や主体的に考える素養と能力を身につかせます。
- 5.卒業研究等を通して、問題解決のための調査・研究の手法を修得させ、物理学の広範な問題に主体的かつ計画的に取り組み、解決することのできるデザイン能力を養います。
- 6.論理的な記述力、および口頭発表、討論の能力を身につけ、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を養います。
- 7.科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、科学者が負っている社会的責任について理解させます。

○ディプロマ・ポリシー

次の資質・能力を身に付けたものに対して卒業を認定し、学位を授与する。

1. グローバルな視点から物事を考える高い素養と能力を身に付けている。
2. 自然現象をどのように理解すればよいか、その論理的思考力を身に付けている。
3. 物理学を基礎とした様々な専門分野への応用、発展させる能力を身に付けている。
4. 創造力や主体的に考える素養と能力を身に付けている。
5. 問題解決のための調査・研究の手法を修得し、物理学の広範な問題に主体的かつ計画的に取り組み、解決することのできるデザイン能力を身に付けている。
6. 論理的な記述力、および口頭発表、討論の能力を備え、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付けている。
7. 科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、科学者が負っている社会的責任について理解している。

○カリキュラム・ポリシー

物理学の基礎的知識、論理的思考力を修得させるため、基礎的な物理学の科目を中心とした教育課程を編成する。

1. 1年次では、講義で学習した内容を、体験を通してより深く理解できるよう工夫し、論理的思考力を身に付けるために、物理学、地学、化学、生物学の自然科学および数学の基礎科目とともに前期に物理学実験を配置する。
2. グローバルな視点から物事を考える高い素養と能力を身に付けるために、人文社会科学系科目を含む幅広い教養科目、健康・スポーツ科学科目、情報基礎科目を置く。
3. 2年次では、必要となる数学的基礎とともに学び、論理的思考力を養うために、力学・電磁気学という物理学の基礎科目を配置する。
4. 国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を養うために、科学分野の英語を専門的に学ぶ科目を配置する。
5. 低年次に築かれた物理学・数学の基礎力を基にして、電子・原子から地球・宇宙まで幅広いスケールの自然現象を物理科学的にとらえる力を養うために、3年次に統計物理学・

量子力学を配置する。

6.議論を通して学生の理解を助け、様々な専門分野への応用、発展させる能力を養い、加えて、科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、科学者が負っている社会的責任についても理解するために、演習科目を数多く配置する。

7.学生が将来自らの専門分野を選択する際の助けとするために、2年次から、固体物理学、地球科学、宇宙物理学などの専門分野の科目を配置する。また、学習した内容をより深く理解するために講義と並行して行われる実験科目を配置する。

8.あらかじめ結果のわかっている実験を行うだけでなく、研究を進める上で必要になる問題解決力およびデータ収集・分析力を鍛錬し、創造力や主体的に考える素養と能力を養うために、3年次に、自然現象の理解や物理量の測定などを目的とした実験装置を学生自らが考案し、制作・評価する実験科目を配置する。

9.研究を進める上で必要なコンピューターリテラシーを修得するために、計算物理科学とともに、コンピュータを用いたデータ収集・解析・制御を学ぶ実験科目を配置する。

10.4年次には各教員の主宰する研究室に所属して、論理的な記述力、および口頭発表、討論の能力、問題解決デザイン能力を修得するために、専門的なテーマについての卒業研究や演習を配置する。

11.成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

分子科学課程

○教育目的

物質の示す多様な構造と性質とを理論と実験の両面から分子のレベルで解明し、優れた機能を有する新物質の創造にとりくむ「分子科学」の専門的素養を修得した人材を育成します。これらを修得する過程を通して「論理的な思考力」と「明快にコミュニケーションをとる能力」とを鍛錬し、分子科学分野はもとより、学際領域や融合領域などの新しい分野にも踏み込んでいくことのできる確固たる基礎力を身につけた人材の育成を目指します。

○教育目標

上記を達成するための具体的な教育目標を次のように設定しています。

- 1.分子と外場との相互作用を理論と実験の両面から解析し理解する物理化学の基礎知識と実験手法および計算機を活用した化学反応の解析方法を修得します。
- 2.炭素骨格を有する分子である有機分子の合成と、反応性を中心とした機能を解明する有機化学および生物化学の基礎知識と実験手法を修得します。
- 3.典型元素と遷移元素とが形成する無機および有機金属分子の合成と、反応性を中心とした機能を解明する無機化学の基礎知識と実験手法を修得します。
- 4.分子と外場との相互作用現象を活用して物質を構成する基本単位である分子の構造を解明するための基礎知識を修得し、分子構造を解析する能力を養います。
- 5.英文テキストや最新の英語論文を読む能力、研究成果を英語論文として発信する能力の鍛錬を通して、コミュニケーションツールとしての英語能力とその土台となる国語力とを鍛錬します。
- 6.解答未知の課題に対して、理論と実験の両面から、個人レベル／グループレベルでのディスカッションにより問題点を明確にしつつ取り組むことを通して、調査・研究の方法を習得するとともに、ディスカッション能力、発表能力および問題解決能力を養う。問題解決にあたっての論理的な思考と明快なコミュニケーションの重要性を認識し、それらの鍛錬することの意義を体感します。
- 7.数学、物理学、情報処理などの自然科学に関する基礎知識を習得し、問題解決に応用できる能力を養います。

8.応用科学や人文・社会科学に至る幅広い分野の基礎を学ぶことを通して、広い視野に立って物事を考える素養と能力を養います。

○ディプロマ・ポリシー

次の資質・能力を身に付けたものに対して卒業を認定し、学位を授与する。

- 1.分子と外場との相互作用を理論と実験の両面から解析し理解する物理化学の基礎知識と実験手法および計算機を活用した化学反応の解析方法を修得している。
- 2.炭素骨格を有する分子である有機分子の合成と、反応性を中心とした機能を解明する有機化学および生物化学の基礎知識と実験手法を修得している。
- 3.典型元素と遷移元素とが形成する無機および有機金属分子の合成と、反応性を中心とした機能を解明する無機化学の基礎知識と実験手法を修得している。
- 4.分子と外場との相互作用現象を活用して物質を構成する基本単位である分子の構造を解明するための基礎知識を修得し、分子構造を解析する能力を身に付けている。
- 5.コミュニケーションツールとしての英語能力とその土台となる国語力とを修得している。
- 6.調査・研究の方法を修得習得するとともに、ディスカッション能力、発表能力および問題解決能力を身に付けている。
- 7.数学、物理学、情報処理などの自然科学に関する基礎知識を習得し、問題解決に応用できる能力を身に付けている。
- 8.広い視野に立って物事を考える素養と能力を修得している。

○カリキュラム・ポリシー

基礎から応用へ、講義と実験を並行して行なうことにより学生の勉学へのモチベーションの向上をはかると同時に、高校レベルから大学専門レベルへと教育課程をスムーズに連結するカリキュラムを編成する。

- 1.基礎知識を習得し、問題解決に応用できる能力を身に付けるために、1年次前期から化学、数学、物理学、生物学などの専門基礎講義科目と化学実験を並行して実施する。

- 2.広い視野に立って物事を考える素養と能力を修得するために、低学年次においては、上記の専門基礎科目を共通の基盤とし、これらに加えて幅広い知識の修得・人格形成のための外国語科目、教養科目、自然科学系科目を組み合わせるカリキュラムを編成する。
- 3.分子科学の主題科目である化学分野の基礎知識と実験手法を修得するために、無機化学、有機化学、物理化学、生物化学を中心に分子構造解析など基礎重視の観点から質・量共に充実した科目を専門科目として配置する。
- 4.調査・研究の方法を修得するとともに、ディスカッション能力、発表能力および問題解決能力を身に付けるために、実験の必修科目を各々2年次後期から3年次後期までの3学期で連続的に配置するとともに、4年次には各教員の個別指導の下に特定の課題についての卒業研究を配置する。
- 5.英文テキストや最新の英語論文を読み、読解力、コミュニケーションツールとしての英語能力とその土台となる国語力を修得するために、科学分野の英語を専門的に学ぶ科目を設置する。
- 6.成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

生物科学課程

○教育目的

21 世紀は生命科学の時代と言われ、「生物とは何か」、「生命とは何か」を明らかにするために、新たな視点からの教育・研究が求められています。生命の遺伝情報はゲノムに含まれ、遺伝子がコードするタンパク質には様々な生体機能の謎が含まれています。タンパク質の合成は精緻な分子機構により制御されていて、細胞あるいは個体レベルの様々な生理反応を演出しています。さらに個体の集合である個体群・群集は生態系の要素として、豊かな自然環境と生物の多様性を生み出しています。このような階層構造を持つ生物科学を学ぶために、ミクロからマクロなレベルの生命現象を見通せる幅広い基礎学力を身につける一方で、高度な専門知識も学び、生物科学のみならず学際領域や複合領域などの新しい分野にも進出することのできる人材の育成を目指します。

○教育目標

上記を達成するための具体的な教育目標を次のように設定しています。

1.生物科学の階層性を認識し、ミクロからマクロにわたる次の生物科学の分野について重点的に学びます。

(1) 生体分子やその集合体の構造と機能を理解します。

(2) 細胞の構造と機能、細胞から成る組織や器官の役割、形成機構、制御機構を理解します。

(3) 個体レベルや集団レベルでの生物の行動と多様性を、生物間および環境との相互作用から理解する。

2.上記の生物科学を理解するために必要な、物理、化学および数学に関する基礎知識を習得します。

3.最先端の生物科学を理解するために、コンピュータによる情報処理能力を習得し、さらに様々な分析機器について学びます。

4.総合科学としての生物科学を理解するため、自然科学のみならず、人文・社会科学についても幅広い知識を修得します。

5.科学の共通言語である英語について、英文テキストや最新の英語論文を読む能力、研究成果を英語論文として発信する能力、英語によるコミュニケーション能力を鍛錬します。

6.卒業研究では、自分自身で一つの研究を行うことを体験します。その際に、研究課題の問題点を明確にし、文献探索、ディスカッションなどからその問題点の解決を目指す実験計画を自ら導きだし、得られた結果の解析・評価を行う能力を獲得します。さらに、得られた結果をまとめて、他人に解りやすく発表する能力を習得します。

○ディプロマ・ポリシー

次の資質・能力を身に付けたものに対して卒業を認定し、学位を授与する。

1.物理、化学および数学に関する基礎知識をもとに、生物科学（生体分子の構造と機能、細胞の構造と機能、種や個体の多様性）を理解している。

2.様々な分析機器ならびに、コンピューターによる情報処理技術の発展に伴う、最先端の生物科学を理解している。

3.自然科学のみならず、人文・社会科学についても幅広い知識をもとに、多様な視点から物事を考え、生物科学の総合科学的な側面を理解している。

4.科学の共通言語である英語について、英文テキストや最新の英語論文を読む能力、英語によるコミュニケーション能力を身に付けている。

5.生物科学領域の専門的知識を修得し、自然科学を基礎とした様々な専門分野における問題解決能力、および発展させる能力を身に付けている。

6.研究課題の問題点を明確にし、その問題点の解決をめざす実験計画を自ら導きだす力、結果の解析・評価を行う能力、ディスカッション能力、プレゼンテーション能力を身に付けている。

○カリキュラム・ポリシー

学域4年間で一応の完結性をもたせつつ大学院までを視野に入れ、生物の持つ普遍性と多様性を深く理解することを目的として、基礎的内容から専門的内容へと段階的に進行する一貫したカリキュラムを編成する。

1.生物科学の階層性を認識し、ミクロからマクロにわたる次の生物科学の分野について重点的に学び、深い知識を修得する。

(ア) 生体分子やその集合体の構造と機能を理解するために、生化学科目、分子生物学科目、化学系科目などを置く。

(イ) 細胞の構造と機能、細胞から成る組織や器官の役割、形成機構、制御機構を理解するために、細胞生物学科目、遺伝子工学などを置く。

(ウ) 種や個体の多様性や、環境中でのそれらの相互作用を理解するために、生態学科目などを置く。

2.1 年次には自然科学の基礎と教養科目を学び2 年次から生物科学課程に進級して最終年次までを通して、様々な階層における生物科学の知識、とりわけ、生物の普遍性と多様性を理解し、専門分野における問題解決能力、および発展させる能力を身に付けるために専門科目を置く。

3.生物科学の各専門分野の知識だけでなく、その理解の基礎となる自然科学一般の概念(物理、化学、数学)や、情報処理とデータの統計的処理、測定・分析手法などの方法論も併せて修得し、多様な視点から物事を考える高い素養と能力を身に付けるために共通教育科目、専門基礎科目、専門科目を適切に配置する。

4.議論を通して学生の理解を助け、様々な専門分野への応用、発展させる能力を養うために、実験、演習科目を数多く段階的に配置する。

5.英語論文を読む能力、英語によるコミュニケーション能力を身に付けるために、科学分野の英語を専門的に学ぶ科目をはじめ演習科目を配置する。

6.専門的な研究テーマに取り組む中で、研究目的について考え、必要な情報を集めて実験を行い、結果について考察とディスカッションを行い、まとめて発表する、という各段階を経て研究の方法論を修得するために、生物科学演習を置く。

7.自分自身で一つの研究を行うなかで、研究課題の問題発見、文献探索、ディスカッション、問題解決能力、主体的に実験を計画・遂行する力、結果の解析・評価を行う能力を獲得し、さらに、他人に分かりやすく発表する能力(プレゼンテーション能力)も修得するために、卒業研究を配置する。

8.成績評価の基準と方法については、生命環境科学域のカリキュラムポリシーで定める。

地域保健学域

○教育目的

生命の尊さと人の尊厳を重んじ、豊かな人間性と深い教養を備え、人と社会に対する包括的視野と、人を支援する専門的でかつ協働的な実践力を身に付け、地域社会および国際社会において人々の健康と福祉の向上に寄与する人材を育成します。

○教育目標

- 1.高い倫理観、多様性を認め合える寛大な心、人権意識、深い洞察力、鋭い感性を備えてヒューマンサービスを実践できます。
- 2.看護、リハビリテーション、栄養、福祉、教育の専門職に必要な高度な知識・技術・科学的判断力・課題探求志向を養います。
- 3.対人援助の基盤となる人の理解、コミュニケーション能力を身に付けます。
- 4.地域社会の発展はもとより、英語等の語学力の習得により国際的にも貢献できます。
- 5.柔軟な思考力と実践力を養い、生涯にわたって自らの専門領域を発展させる能力を身に付けます。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

生命の尊さと人の尊厳を重んじ、豊かな人間性と深い教養を備え、人と社会に対する包括的視野と、人を支援する専門的でかつ協働的な実践力、地域社会および国際社会において人々の健康と福祉の向上に寄与する能力を修得した者に学位を授与する。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

教育課程は、共通教育科目、専門基礎科目および専門科目で構成し、専門科目において特に学域共通のコアとなる学域共通科目の区分を設ける。

初年次から配当する共通教育科目については、学士課程教育の全学的な方針を尊重し、大

学生として自ら学ぶ姿勢を身に付け、幅広い教養と社会人としての基礎力を高めるため、一般的な教養科目に加え、少人数ゼミナールや外国語科目、教養展開科目などを必修指定して積極的に学修できるように配慮する。

共通教育科目と専門科目とのスムーズな接続に配慮しつつ、専門基礎科目とともに学域の理念を具体化する学域共通のコア科目群を設置する。すなわち「学域共通科目」として講義科目である「生命倫理学」「人間支援科学」「コラボレーション論」「コミュニケーション論」「ケアリング論」の5科目（3科目以上を必修）を設置し、看護学類、総合リハビリテーション学類、教育福祉学類の3学類の学生たちが人間を支援するために必要な倫理や基本的な知見について共に学び、協働的な実践を行うための共通の基盤を形成する。

そのうえで学類ごとの専門科目の設置についても、次の点については学域で一致した配慮を行う。

- ・少人数による授業を基本としたきめ細かな教育の実施
- ・主体的な学習への関心と方法を身につけるための実践的・臨床的な体験を含む演習・実習科目の初年次からの配置
- ・学外実習施設との密接な連携による、教育と実践の効果的な学習体制の充実
- ・実践的なチーム医療や福祉・教育とのコラボレーションが可能になるような教育の実施

なお、さらに自由選択枠を設け、多様な関連分野への主体的な関心に基づき、学類の専門科目の枠を超えた科目選択を可能とする。

成績評価の基準

1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた基準に沿って、A+からDの評語で評価する。特に、単位修得（C以上）の基準を到達度として明記する。

2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善を図る。

3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善を図る。

成績評価の方法

1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組み合わせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。

2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

人は地域社会において、健康で文化的な生活を営むためには、身体的、精神的、社会的に良好な状態で生活できることが大切です。ライフステージで生じる子育て、教育、医療、介護などの問題は複雑で多様化しています。保健・医療・福祉・教育などのヒューマンサービスの分野で、生命の尊さと人の尊厳を重んじ、豊かな人間性と深い教養を備えた人材を育成する必要があります。地域保健学域は、人と社会に対する包括的視野と、人を支援する専門的かつ協働的な実践力を身につけ、地域社会および国際社会において人々の健康と福祉の向上に寄与する人材を育成します。

したがって、地域保健学域では次のような学生を求めています。

- 1.保健・医療・福祉・教育の分野で人々に貢献することをめざす人
- 2.人々の喜び、悲しみ、痛みを分かち合え、人の主張と気持ちを受けとめる寛大な心と包容力を持った人
- 3.学問の向上に興味をもち、探究心旺盛な人
- 4.人々と連携し、問題を解決する意欲と能力を持った人

以上に基づき、次の 1～3 の能力や適性を身につけた学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理とも広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.対人支援のコミュニケーションのための基礎となる語学力（国語・英語）を有していること
- 3.論理的な思考能力を有していること

看護学類

○教育目的

命の尊重と個人の尊厳を基盤とし、豊かな人間性を形成するとともに、科学的専門知識・技術を教授し、看護を総合的な視野で捉えられる人材を育成する。

○教育目

教育目的をふまえた教育実践により、卒業時には次のような能力を有し、看護師、保健師として広く社会に貢献できる人材を育成する。

- 1.人間の痛み、苦しみを分かち合え、幅広い教養を身に付け、生命の尊厳について深く理解し、行動できる豊かな人間性を養う。
- 2.看護に必要な知識と技術を習得し、科学的根拠に基づく適切な判断と問題解決能力とあわせ、社会の変化や医療技術の発展に対応できる能力を養う。
- 3.保健・医療・福祉、教育、地域においてヒューマンサービスを提供する人々と連携し、看護の実践と調整的な機能を果たす能力を養う。
- 4.変化する社会の中で看護の役割を展望し発展させ、地域的・国際的な視野で貢献できる能力を養う。
- 5.看護学への関心を深め、総合的な視野と看護研究の基礎能力を養う。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

- 1.人間の痛み、苦しみを分かち合え、幅広い教養を身に付け、生命の尊厳について深く理解し、行動できる豊かな人間性が形成されている。
- 2.看護に必要な知識と技術を修得し、科学的根拠に基づく適切な判断と問題解決能力とあわせ、社会の変化や医療技術の発展に対応できる能力を修得している。
- 3.保健・医療・福祉・教育・地域においてヒューマンサービスを提供する人々と連携し、看護の実践と調整的な機能を果たす能力と看護研究の基礎能力を修得している。
- 4.変化する社会の中で看護の役割を展望し、発展させ、地域的・国際的な視野で貢献でき

る能力を修得している。

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

看護職として必要な豊かな人間性と倫理観を育成し、看護学を学ぶために必要な基盤的知識を獲得できるよう系統性を重視して、共通教育科目、専門基礎科目を1～2年次に集中配当するとともに、能動的な学修の充実を図るために実習科目や学域共通科目も含む専門科目、自由選択科目、資格科目で構成された教育課程に基づき、所要単位を修得することを卒業要件とする。また、すべての学生が看護師の国家試験受験資格を得られる教育内容を基本的構成とし、選択により保健師の受験資格も得られ、養護教諭免許状の取得にも配慮した教育課程を編成する。

1.幅広い教養を身に付け、行動できる豊かな人間性を養うため、共通教育科目（導入科目では他学類生とともに学ぶ初年次ゼミナール、教養科目では人文社会科学系、自然科学・複合領域系、教養展開の各科目、基盤科目では健康・スポーツ科学、外国語、情報基礎の各科目）を1～2年次に配当する。

2.看護に必要な知識と技術を修得し、適切な判断と問題解決能力や社会の変化や医療技術の発展に対応できる能力を育成するため、「解剖生理学」、「疫学」、「保健統計学」をはじめとした専門基礎科目や、「基礎看護学」、「療養支援看護学」、「生活支援看護学」、「家族支援看護学」、「看護の統合と実践」の各領域で構成された専門科目を提供する。

3.多職種と連携しつつ、多面的に看護の実践と調整的な機能を果たす能力を育成するため、専門基礎における医療・保健基礎科目では、「医療と社会福祉学」「カウンセリング論」等を提供する。専門科目では、学類の枠を越えた科目選択を可能とした学域共通科目を設け、4科目を必須科目として配当するとともに、「基礎看護学」、「療養支援看護学」、「生活支援看護学」、「家族支援看護学」の各領域で構成された専門科目や「総合実習」を提供する。

また、看護研究の基礎能力を育成するため、「研究方法論」、「総合研究」を必修科目として提供する。

4.看護の役割を発展させ、地域的・国際的な視野で貢献できる能力を育成するため、共通教育科目（基盤科目である外国語、情報基礎の各科目）を、専門基礎科目である「疫学」、「保健統計学」等を必修科目として提供する。専門科目では、「看護管理学」、「看護教育学」、「総合実習」等を必修科目として、「国際保健」、「災害支援看護論」を選択科目とし

て提供する。

これらの学修成果の評価の方針は以下のとおりとする。

成績評価の基準

- 1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた基準に沿って、A+からDの評語で評価する。特に、単位修得（C以上）の基準を到達度として明記する。
- 2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善を図る。
- 3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善を図る。

成績評価の方法

- 1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組み合わせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。
- 2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

少子化、高齢化、国際化など社会構造の変化と国民のニーズの多様化、医療の高度化、専門化を背景に、わが国の看護・医療は大きく変わりつつあります。その中で看護職の占める役割はますます重要になってきています。看護学類では生命の尊重と個人の尊厳を基盤とし豊かな人間性を形成するとともに、看護の専門的知識・技術をもって社会ニーズに応じて、幅広い分野で活躍できる看護専門職者を育成し、人々の健康の維持・増進に寄与するとともに国際社会に貢献できる人材の育成をめざしています。

したがって、看護学類では次のような学生を求めています。

- 1.人間の喜び、苦しみ、痛みを分かち合え、生命の尊厳について理解しようとする姿勢をもった人
- 2.幅広い学問分野に支えられた専門的な看護に必要な知識・技術を主体的、積極的に修得できる高い基礎学力をもった人
- 3.保健・医療・福祉などの場において他のヒューマンサービスを提供する人々と連携することのできる柔軟性を有しリーダーシップのとれる人
- 4.科学的根拠に基づく看護を提供するための論理的思考力と表現力をもっている人

以上に基づき、看護学類の教育理念・目的にふさわしい学生を受け入れるため、次の1～4の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力と論理的思考力を有していること
- 2.対人支援のコミュニケーションのための基礎となる国語能力を有していること
- 3.英文を読んで理解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していること
- 4.他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力と論理的思考力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、さらに理系型では個別学力検査の数学、理科によって、文系型では個別学力検査の小論文によって評価します。また、国語能力を有していることを、大学入学共通テストの国語、そして文系型では個別学力検査の小論文によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、大学入学共通テストの外国語によって評価します。加えて、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書によって評価します。

一般選抜（後期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。また、コミュニケーションの基礎となる国語能力と論理的思考力を有していること、他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書をもとにした面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、大学入学共通テストの外国語によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、調査書、推薦書によって評価します。また、国語能力および英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力と論理的思考力を有していることを、面接、小論文によって評価します。さらに、コミュニケーションの基礎となる国語能力と他者を理解し、主体的に学習に取り組むことができることを、調査書（活動報告書を含む）をもとにした面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、国語能力と論理的思考力を有していることを、小論文、面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。"

総合リハビリテーション学類

○教育目的

総合リハビリテーション学類は、生命の尊さと人の尊厳を重んじることを基礎にした、専門知識・技術を教授することにより、豊かな人間性と深い教養を備え社会に貢献できる有為な人材を育成し、保健・医療・福祉の向上と地域社会ならびに国際社会に貢献する総合リハビリテーション医療専門職者を育成する。

○教育目標

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

総合リハビリテーション学類の教育目標に定める人材を育成するため、それぞれの専攻が定める卒業要件単位を修得し、次の知識と能力を培った学生に「学士（保健学）」の学位を授与する。

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性
- 2.総合リハビリテーション学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力
- 4.地域社会ならびに国際社会への貢献に必要な情報リテラシー能力とコミュニケーションスキル
- 5.総合リハビリテーション学類の社会的役割を認識し、果たすために必要な学術的探求の基礎能力"

○カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

教育課程は、共通教育科目、専門基礎科目および専門科目で構成する。

学生の専門的知識への興味や将来の進路への期待に応え、学習意欲が高まるよう 1 年次から専門基礎科目の講義・演習・実習を開講する。専門科目は少人数による授業を基本とし、きめ細かな教育を実施する。

臨床実習においては、専門性の高い大阪府内の医療機関を中心に、多様な実習施設で少人数によるきめ細かで実践的な実習を行う。

さらに看護学類、教育福祉学類が開講する科目の受講を可能にし、幅広い知識や技術を養わせる。また、学生の主体的な関心や興味に基づき、学類の枠を越えた科目選択を可能とする。

以上を踏まえ、次のような内容に配慮して教育課程を編成する。

- 1.各専攻の授業を相互に受講できる学際的カリキュラム
 - 2.入学当初から、臨床的な体験を含む演習・実習科目の実施
 - 3.実践的なチーム医療の基礎となる教育の実施
 - 4.総合リハビリテーションの理念を基礎にした、医療専門職者に必要な幅広い共通教育科目、専門基礎科目の開講
 - 5.学外実習施設との密接な連携による、教育と実践の効果的な学習体制の充実
- 6.3 専攻の独自の特性を活かした教育展開

成績評価の基準

- 1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第 14 条に定めた基準に沿って、A+から D の評語で評価する。特に、単位修得（C 以上）の基準を到達度として明記する。
- 2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善を図る。
- 3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏

った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善を図る。

成績評価の方法

1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組みあわせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。

2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。"

○アドミSSION・ポリシー（学生受入の方針）

いま保健・医療・福祉の領域では、複雑化したシステムと専門分化した知識・技術を根幹にあるべきヒューマニズムと調和、発展させることが求められています。総合リハビリテーション学類は、理学療法学、作業療法学、栄養療法学の3分野が有機的に連携して、疾病の予防から治療、回復、社会参加を総合的にとらえる新しいリハビリテーション学を創ろうとしています。

したがって、総合リハビリテーション学類では、次のような有能で活力ある学生を求めています。

- 1.人との関わりを大切にし、相手に対する思いやりや愛情を適切に表現できるとともに、相手の主張や気持ちを受けとめる包容力をもった人
- 2.学問に対する興味と探究心をもち、知識と技術の習得に積極的に取り組む人
- 3.将来、リハビリテーションを総合的にとらえることのできる理学療法士、作業療法士、管理栄養士として、人々の保健・医療・福祉に貢献しようとする熱意をもった人
- 4.国際的視野をもって地域社会に貢献することをめざす人

以上に基づき、総合リハビリテーション学類の教育理念・目的にふさわしい学生を受け入

れるため、次の 1～4 の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.他者理解とコミュニケーションの基礎となる国語能力を有していること
- 3.英文を読んで理解し、書いて表現するための基礎的な能力を有していること
- 4.論理的思考の基礎となる数学的素養を有していること

理学療法学専攻

○教育目標

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性を身に付ける。
- 2.理学療法学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力を身に付ける。
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力を身に付ける。
- 4.情報リテラシー能力とコミュニケーションスキルを身に付け、地域社会並びに国際社会に貢献しうる能力を身に付ける。
- 5.総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の社会的役割を認識し、学術的探求の基礎能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性
- 2.理学療法学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加を目指す人びとを支援する能力
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力
- 4.地域社会ならびに国際社会への貢献に必要な情報リテラシー能力とコミュニケーションスキル
- 5.総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の社会的役割を認識し、果たすために必要な学術的探求の基礎能力"

○カリキュラム・ポリシー

- 1.1～2年次に開講する生命倫理学・臨床心理学・人間発達学等の講義科目を通して、生命

の尊さと人の尊厳について、人間の身体・社会的発達の観点から深く学ぶ。

2.2～3 年次に開講する運動器理学療法学・神経理学療法学・発達理学療法学・内部障害理学療法学等の演習・実習科目を通して理学療学分野の科学的専門知識・技術を学習するとともに臨床実習関連科目で陶冶される実践力に基づき、疾病予防から身体・精神機能障害の回復、維持・向上を図り、社会復帰や社会参加を目指す人びとを支援する能力を身に付ける。これら専門領域の演習・実習科目においては、臨床実習にむけて、領域別に模擬患者を提示し問題解決型学習を行う。

3.2～3 年次に開講する演習科目である公衆衛生学において保健分野、講義科目であるリハビリテーション概論において医療分野、講義科目であるコラボレーション論において福祉分野、講義科目である地域リハビリテーション論・地域理学療法学・在宅リハビリテーション論において地域分野の各分野で活躍する専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力を身に付ける。また、臨床実習科目である理学療法臨床実習において各職種の連携について実践力を養う。

4.1～2 年次に開講する情報基礎等の講義科目である情報処理関連科目において情報リテラシー能力と Academic English 等の演習科目である語学関連科目においてコミュニケーションスキルを身に付け、地域社会並びに国際社会に貢献しうる能力を身に付ける。

5.1 年次に開講する講義科目である理学療法学総論において、理学療法の成り立ち、医療・福祉分野での理学療法士の役割を学習し、3～4 年次に開講する実習科目である理学療法学研究法・理学療法学卒業研究において少人数制のグループワークによる問題解決型学習を行い、プレゼンテーション技法のトレーニングも交え、自己学習能力と探究的態度など理学療法実践に関する学術的探求の基礎能力を身に付ける。

本専攻の学修成果の評価方針は総合リハビリテーション学類カリキュラム・ポリシー記載のものと同一とする。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

理学療法学は、病気、けが、高齢などによって運動機能が低下した状態にある人々に対し、身体機能を科学的に評価して治療する理論と技術の体系です。理学療法では、相手の立場を思いやる豊かな感性と、高度な問題解決能力が求められます。理学療法学専攻では、身体の構造や機能および疾病に関する幅広い学問を修得し、リハビリテーション医療

や地域医療の最前線に立ち得る高度な専門的能力、総合判断力、研究能力を有した理学療法士を育成します。

したがって、理学療法学専攻では次のような学生を求めています。

- 1.人との関わりや思いやりを大切にし、相手の主張や気持ちを受けとめる包容力をもった人
- 2.身体機能や運動を科学することに強い関心をもち、知識と技術の修得に積極的に取り組む人
- 3.将来、理学療法士として、リーダーシップを発揮し、保健、医療、福祉、研究、教育の分野に積極的に貢献しようとする熱意をもった人
- 4.国際的視野をもって広く社会に貢献することをめざす人

以上にに基づき、次の1～4の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.コミュニケーションの基礎となる理解力、表現力を有していること
- 3.英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していること
- 4.理学療法学を学ぶ上で必要となる論理的思考力を有していること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、個別学力検査の小論文および面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。

一般選抜（後期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、面接によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。"

作業療法学専攻

○教育目標

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性を身に付ける。
- 2.作業療法学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力を身に付ける。
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力を身に付ける。
- 4.情報リテラシー能力とコミュニケーションスキルを身に付け、地域社会並びに国際社会に貢献しうる能力を身に付ける。
- 5.総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の社会的役割を認識し、学術的探求の基礎能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性
- 2.作業療法学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力
- 4.地域社会ならびに国際社会への貢献に必要な情報リテラシー能力とコミュニケーションスキル
- 5.総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の社会的役割を認識し、学術的探求の基礎能力

○カリキュラム・ポリシー

- 1.1～2年次に開講する生命倫理学・臨床心理学・人間発達学等の講義科目を通して、生命

の尊さと人の尊厳について、人間の身体・社会的発達の観点から深く学ぶ。

2.2～3 年次に開講する身体障害作業療法学・精神障害作業療法学・発達障害作業療法学・老年期障害作業療法学等の演習・実習科目を通して作業療学分野の科学的専門知識・技術を学習するとともに臨床実習関連科目で陶冶される実践力に基づき、疾病予防から身体・精神機能障害の回復、維持・向上を図り、社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力を身に付ける。専門領域の演習・実習科目においては、臨床実習にむけて、領域別に模擬患者を提示し問題解決型学習を行う。模擬患者で得た学習内容を同専攻内の他学生に対してプレゼンテーションを実施し作業療法の実践力の定着を図る。

3.2～3 年次に開講する演習科目である公衆衛生学において保健分野、講義科目であるリハビリテーション概論において医療分野、講義科目であるコラボレーション論において福祉分野、講義科目である地域リハビリテーション論において地域分野の各分野で活躍する専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力を身に付ける。また、臨床実習科目である作業療法臨床実習において各職種の連携について実践力を養う。

4.1～2 年次に開講する情報基礎等の講義科目である情報処理関連科目において情報リテラシー能力と Academic English 等の演習科目である語学関連科目においてコミュニケーションスキルを身に付け、地域社会並びに国際社会に貢献しうる能力を身に付ける。

5.1 年次に開講する講義科目である作業療法学総論において、作業療法の成り立ち、医療・福祉分野での作業療法士の役割を学習し、3～4 年次に開講する実習科目である作業療法研究法・作業療法卒業研究において自己学習能力と探究的態度など作業療法実践に関する学術的探求の基礎能力を身に付ける。

本専攻の学修成果の評価方針は総合リハビリテーション学類カリキュラム・ポリシー記載のものと同一とする。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

作業療法学は、乳幼児から高齢者までの身体や精神に障がいのある方々、またはそれが予測される方々の主体的な日常生活能力・社会適応能力の獲得を目的とした治療、指導の理論と技術の体系です。作業療法では、対象者（児）の機能だけでなく、個人の考えや生活環境、社会環境を把握する能力も求められます。作業療法学専攻では、人々の活動と心身機能、環境との関係、脳の働き、発達や老化などの知識に基づく実践技術と研究能力、さらに対象者（児）に寄り添う「こころ」を有し、地域社会の保健、医療、福祉および教育

分野においてリーダーシップを発揮できる作業療法士を育成します。

したがって、作業療法学専攻では次のような学生を求めています。

- 1.多様な価値観を受け入れる柔軟な思考をもち、人との関わりを大切に思う人
- 2.人々の作業と健康に高い関心をもち、作業療法の知識・技術の習得に積極的に取り組む人
- 3.将来、作業療法士として地域社会の保健、医療、福祉、研究、教育に貢献しようとする熱意をもった人
- 4.国際的視野をもって広く社会に貢献することをめざす人
- 5.人々の健康と生活を守るために必要な基本的生活習慣を身につけている人

以上にに基づき、次の1～4の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.他者理解とコミュニケーションの基礎となる理解力、表現力を有していること
- 3.英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していること
- 4.作業療法学を学ぶ上で必要となる論理的思考力を有していること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大入学共通テスト、調査書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、個別学力検査の小論文および面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。

一般選抜（後期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること

を、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、面接によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。理解力、表現力、論理的思考力を有していることを、小論文、口頭試問・面接によって評価します。さらに、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。

栄養療法学専攻

○教育目標

- 1.生命の尊さと人の尊厳を重んじ、人の痛みや苦しみを分かち合える豊かな人間性を身に付ける。
- 2.栄養療法学分野における科学的専門知識・技術に基づき、疾病予防から身体機能の回復、維持・向上を図り社会復帰や社会参加をめざす人びとを支援する能力を身に付ける。
- 3.保健、医療、福祉機関や地域において、他の医療専門職者と連携し、調整的な機能が果たせる能力を身に付ける。
- 4.情報リテラシー能力とコミュニケーションスキルを身に付け、地域社会並びに国際社会に貢献しうる能力を身に付ける。
- 5.総合リハビリテーション学類栄養療法学専攻の社会的役割を認識し、学術的探求の基礎能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー

- 1.幅広い教養並びに管理栄養士として必要な情報を国内外から収集し、発信する能力
- 2.生命の尊さと人の尊厳の重要性を認識するとともに、健康長寿社会に貢献するために必要な能力
- 3.管理栄養士として、他職種との連携なども含めて、保健・医療専門職としての機能が果たせる能力
- 4.栄養学を学ぶために必要な生命科学に関する幅広い基礎的分野の理解力。
- 5.栄養学・食品学に関する高度で専門的な知識と論理的で科学的な思考能力をもって、管理栄養士として保健・医療・福祉機関や食品・医薬品産業で活躍できる能力

○カリキュラム・ポリシー

- 1.幅広い教養と情報の収集・発信能力を身に付けるために、多数の教養科目や情報基礎、Academic English などの共通教育の講義科目を1～2年次に配置する。

2.生命倫理や健康長寿について考えるために、生命倫理学や社会健康科学などの専門基礎の講義科目を開講する。

3.保健・医療専門職として必要な知識を習得するために、人間支援科学論やコラボレーション論などの学域・学類共通専門の講義科目を設ける。

4.幅広い生命科学に関する知識の習得を目的に、解剖生理学、生化学、病態生理学などの専門基礎の講義科目を1～2年次に配置する。

5.栄養学・食品学に関する膨大な知識や考え方について、基礎栄養学や食品科学などの基礎的な講義科目を1～2年次に、臨床栄養学、栄養教育論や食品衛生学などの専門性の高い講義科目は2～3年次に、さらに臨床栄養学実習や給食経営管理実習等の実習科目並びに臨地実習科目である栄養療法学臨地実習や卒業研究などを3～4年次に配置しており、系統立てて学ぶことができる。実践系分野の演習・実習科目では、症例検討により問題解決型学習を行う。また、卒業研究では発表会でのプレゼンテーションを行う。

本専攻の学修成果の評価方針は総合リハビリテーション学類カリキュラム・ポリシー記載のものと同一とする。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

食は健康の源です。栄養学は傷病者や健常者に関わらず、すべての人々を対象とした学問です。栄養療法学専攻では、食や栄養学の基礎、応用、実践と広範な内容を体系的に学ぶとともに、科学的根拠に基づいた論理的思考能力を身につけ、食を通じて健康、医療、保健、福祉、教育に貢献する管理栄養士、教育者、研究者を育成します。

したがって、栄養療法学専攻では次のような学生を求めています。

1.食と健康に関する専門的な知識を身につけ、社会における食と健康についての様々な問題に挑戦する意欲をもった人

2.幅広い興味をもち、自ら進んで学ぶ探求心をもっている人

3.将来、管理栄養士として、人々の健康、医療、保健、福祉、研究、教育に指導的立場で貢献しようとする熱意をもった人

4.国際的視野をもって広く社会に貢献することをめざす人

以上に基づき、次の 1～4 の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していること
- 2.実験結果（データ）の解析などに必要な論理的思考の基礎となる数学の基礎学力を有していること
- 3.英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していること
- 4.栄養学を学ぶ上で基礎となる物理、化学、生物のうち少なくとも 1 科目について深く学び、高い学力を有すること

一般選抜（前期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。数学の基礎学力を有していることを、個別学力検査の数学によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、個別学力検査の英語によって評価します。さらに、物理、化学、生物のうち少なくとも 1 科目について深く学んでいることを、個別学力検査の理科によって評価します。

一般選抜（後期日程）

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書、推薦書、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、小論文、口頭試問・面接、最終出身学校の成績証明書によって評価します。数学の基礎学力を有していること

を、日本留学試験の数学によって評価します。また、英文を読解し、英文で表現するための基礎的な能力を有していることを、TOEFL の成績によって評価します。さらに、物理、化学、生物のうち少なくとも 1 科目について深く学んでいることを、日本留学試験の理科によって評価します。

教育福祉学類

○教育目的

生命の尊さと人の尊厳を重んじ、豊かな人間性と深い教養を備え、人と社会に対する包括的視点と福祉・保育・教育分野における高い専門性に根ざした実践力を持って人々と協働し、地域社会ならびに国際社会においてヒューマンサービスの向上に貢献する人材を育成する。

○教育目標

上記の教育目的を達成するために次の教育目標を掲げる。

- 1.人文・社会・自然科学に関する教養を広く身に付けることにより、ヒューマンサービスを実践するための素地として、人間と社会の多様性を理解する。
- 2.現代社会が抱える諸問題とヒューマンサービスのための基本的視点を学ぶことにより、高い倫理的意識と社会的責任意識をもつ。
- 3.社会科学を基盤とし、社会福祉・保育・教育分野の専門的知識・技術を体系的に修得することにより、人と社会を包括的視点から捉えることのできる専門的知識・技術と科学的判断力を身に付ける。
- 4.高い水準の情報リテラシー能力とコミュニケーションスキル、論理的思考力を身に付けることにより、福祉・教育・保健機関や地域において、ヒューマンサービスを提供する人々や当事者とともに問題解決にあたることのできる連携と協働の能力を身に付ける。
- 5.英語その他の外国語を修得することにより、地域社会はもとより国際社会に貢献できる力を身に付ける。
- 6.総合的かつ柔軟な思考力と実践力を養うことにより、生涯にわたって学習し、課題を発見・解決し、自らの専門領域を発展させる能力を身に付ける。

○ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

教育福祉学類において所定の期間在学し、当学類で開講される教育福祉ならびに関連分野に関する所定の単位を修得することによって、次の能力を身に付けた学生に学位を授与す

る。

- 1.人文・社会・自然科学に関する幅広い教養を身に付け、ヒューマンサービス実践の素地となる、人間と社会の多様性を理解する能力を備えている。
- 2.現代社会が抱える諸問題とヒューマンサービスの基本的視点を踏まえ、高い倫理的意識と社会的責任意識を備えている。
- 3.社会福祉・保育・教育分野の専門的知識・技術を体系的に修得し、人と社会を包括的な視点からとらえる専門的知識・技術を備えている。
- 4.高い水準の情報リテラシー能力と論理的思考力、コミュニケーション能力を身に付け、ヒューマンサービスを提供する人々や当事者とともに問題解決にむけた連携・協働を行う能力を備えている。
- 5.英語その他の外国語を修得し、地域社会はもとより国際社会に貢献できる力を備えている。
- 6.総合的かつ柔軟な思考力と実践力を身に付け、生涯にわたって学習し、課題を発見・解決し、自らの専門領域の発展に寄与する基盤となる能力を備えている。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

教育課程編成

教育福祉学類では、福祉・保育・教育分野における高い専門性に根ざした実践力によって、ヒューマンサービスの向上に貢献する人材を育成するために、次のようなカリキュラムを提供する。

- 1.論理的思考力や文章による表現力などで大学での学びの基礎となる力を養うために、導入科目（初年次ゼミ）を配置する。
- 2.幅広い教養、多面的な視野を養うために、教養科目および基礎科目（情報基礎科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）を配置する。
- 3.ヒューマンサービスの素地となる知識を習得し、人間と社会の多様性を理解するために、学域共通科目、基盤講義科目を配置する。
- 4.現代社会が抱える諸問題やヒューマンサービスの基本的視点を理解するために、基幹講義科目、基幹演習科目を配置する。

- 5.倫理的意識や社会的責任意識を醸成するために、必修科目として生命倫理学、人間支援科学論、コラボレーション論を置く。
- 6.社会福祉・保育・教育分野の専門的知識・技術を体系的に修得するために、福祉系展開科目、教育系展開科目、子ども家庭系展開科目からなる専門展開科目群を配置する。これらの科目群には、グループワーク、フィールドワークなどの授業方法を活用したものも含まれる。
- 7.情報リテラシー能力と論理的思考、コミュニケーション能力を身に付け、問題解決に向けた演習課題として、少人数での演習科目を発展演習科目に配置する。
- 8.共通教育科目の基盤科目に英語、初修学国語の科目群、発展演習科目として、外書購読演習を配置する。
- 9.海外における社会や文化に触れ、国際的な視点を養うために、教育福祉インターンシップとして海外研修を実施する。
- 10.総合的かつ柔軟な思考力と実践力を養い、自ら課題を発見し問題解決に取り組む姿勢を培うために、社会福祉実習や保育実習を含む展開実技実習科目、卒業研究作成等に向けた総合演習科目を設定する。

成績評価の基準

- 1.成績評価は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、授業科目ごとに「到達目標」を設定し、履修者の到達目標に対する達成度に応じて、履修規程第14条に定めた基準に沿って、A+からDの評語で評価する。特に、単位修得（C以上）の基準を到達度として明記する。
- 2.学期ごとに全ての授業の成績分布を集計し、到達目標の達成度について組織的に検討し、改善をはかる。
- 3.成績評価は、達成度の絶対評価を基本として行うが、受講者数が少ない科目を除き、偏った評語の分布にならないように努力する。また、偏った分布になった場合はその原因を分析し、次期以降に改善をはかる。

成績評価の方法

- 1.成績評価は、最終の定期試験のみに偏重することなく、レポート、プレゼンテーション、学修態度等の多様な要素を組みあわせて到達目標の達成度を評価する。なお、授業への出欠状況は成績評価には使わない。
- 2.具体的な評価方法は、授業担当教員が決定し、評価の基準、評価に用いる項目の配分を含めて、シラバスを通じて学生に事前に提示する。

○アドミッション・ポリシー（学生受入の方針）

教育福祉学類は、多様で複雑な課題を抱える現代社会において、生命を尊重し、人間の尊厳を守り、すべての人が幸せに暮らせる社会づくりに貢献できる人の育成をめざします。そのために、本学類では福祉系および教育系の専門職を育成するとともに、地域社会・国際社会との協働を重視した教育研究を行います。

したがって、教育福祉学類では次のような学生を求めています。

- 1.現代の社会と人間をめぐる諸問題に関する基本的知識をもち、問題の解決に取り組む意欲をもっている人
- 2.社会的な事象を総合的な視野から究明していくことのできる幅広くバランスのとれた基礎学力と論理的思考力を備えた人
- 3.福祉や教育などのヒューマンサービスの専門的知識を身につけ、社会への貢献をめざす人
- 4.様々な社会活動を通して、様々な立場にある人と対話し、協力して働くことへの強い関心と意志をもっている人

以上に基づき、教育福祉学類にふさわしい学生を受け入れるため、次の1～5の能力や適性をもつ学生を選抜します。

- 1.高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していること
- 2.歴史や社会問題に関する知識を身につけていること

3.様々なコミュニケーションのための基礎となる語学力（国語や英語など）を有していること

4.論理的な思考力を備えていること

5.社会的な活動に関する経験や意欲をもっていること

一般選抜（前期日程）

高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。歴史や社会問題に関する知識を有していることを、大学入学共通テストの地歴・公民によって評価します。また、語学力を有していることを、大学入学共通テストの国語、外国語と個別学力検査の英語、小論文によって評価します。さらに、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、個別学力検査の小論文によって評価します。

一般選抜（後期日程）

高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。歴史や社会問題に関する知識を有していることを、大学入学共通テストの地歴・公民によって評価します。また、語学力を有していることを、大学入学共通テストの国語、外国語によって評価します。さらに、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、面接によって評価します。

学校推薦型選抜

高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していることを、調査書、推薦書、小論文によって評価します。また、歴史や社会問題に関する知識、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、小論文、面接によって評価します。さらに、語学力を有していることを、小論文によって評価します。

総合型選抜

高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していることを、推薦書、小

論文によって評価します。また、歴史や社会問題に関する知識、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、小論文、面接、自己評価書、学習計画書によって評価します。さらに、語学力を有していることを、小論文によって評価します。

社会人特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、出願資格を証明する書類、履歴書、志願理由書によって評価します。また、歴史や社会問題に関する知識、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、小論文、面接によって評価します。さらに、語学力を有していることを、小論文によって評価します。

障がい者特別選抜

高等学校における広い教科・科目に関して高い基礎学力を有していることを、大学入学共通テスト、調査書によって評価します。歴史や社会問題に関する知識を有していることを、大学入学共通テストの地歴・公民によって評価します。また、語学力を有していることを、大学入学共通テストの外国語によって評価します。さらに、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、面接によって評価します。

外国人留学生特別選抜

大学で学習するための基礎学力を有していることを、日本留学試験、最終出身学校の成績証明書によって評価します。また、歴史や社会問題に関する知識、論理的思考力および社会的な活動に関する経験や意欲を有していることを、小論文、面接によって評価します。さらに、語学力を有していることを、日本留学試験、TOEFL の成績によって評価します。